

説得の文章

——『史記』の蘇秦・張儀列伝を例に

大 田 加代子

0. はじめに

『史記』は今から約二千年も前に書かれた中国の歴史書である。歴史書とはいっても、今日私達が抱いている歴史書のイメージとは異なる点がある。必ずしも、“史実”と考えられる事柄を厳選して編む、というわけではなく、むしろゴシップや様々なエピソードなど、人々がそうであったと確信している、という意味での“事実”の記述が、とりわけ列伝には多く見られる。又、会話が多いのもその特徴として挙げられる。

今ここで取り上げようとしているのは、そういった列伝の中でも特にパターン化された、戦国時代の二人の弁士、蘇秦と張儀の列伝である。蘇秦は六国を連合して秦に対抗させようと合従政策を説き、張儀はやや遅れて、六国が各々秦と同盟を結ぶ連衡政策を説いて秦の勢力拡大を計った。両者の列伝とも、大きく分けて6つのパーツから成っている¹⁾。列伝に常套の人定記述の後、まず始めに下積み時代のエピソードがあり、次に各々、その政策が受け入れられない時代があり、(蘇秦は三度の失敗、張儀は司馬錯との論争に完敗)、そして合従・連衡の政策が六国で採用される過程とその成功、他人の讒言による権力の失墜と復権、そして最期。

本稿で取り上げるのは、上述した6つのパーツの中の第三、第四、第五の部分である。第四の部分は、六国に次々と政策を説いてまわる過程であり、ここには両者の最もパターン化された説得の型がみられる。基本の型を、相手国によって、又状況の変化によって様々に変形させながら、縦横に論旨を展開し、読み手はその変形を手掛かりに、自ずと六国の地理的關係、力關係などを推し測っていくこ

とになる。六国に対する説得とは対照的なのが、第三、第五の部分である。特に第五段階の権力失墜後に自らの復権と保身のためにする説得は、非常に趣を異にする。そこで本稿では、成功の前後の論調と、六国遊説中の蘇秦と張儀の弁論²⁾の対比を中心に、説得の言語の特徴もあわせて考察の対象とする。両者の説得の文章（ここでは全て会話文）の論理の構造を考察する際に援用したのは、アカデミック・ディベート（academic debate）の理論である。筆者は個人的体験として、米国などで盛んなアカデミック・ディベートに携ったことがある。これは、ある政策に対して肯定的（affirmative）な立場、或は否定的（negative）な立場から立論し反駁するという、政策決定の一種のシミュレーションゲームであるが、蘇秦と張儀の弁論はこのディベートに酷似しているのが注目される。現状分析、プランの導入、プランのもたらすメリット、現状維持の招くディメリット、又は相手側のプランを導入した際に生ずるディメリットの言及、或は if-then, why-because の論理の運び方など共通点が多い。それに加えて説得される側、すなわち聞き手の心理状態を配慮し、自策を効果的にアピールする点は、説得の技術として見逃せない。現在では学校教育の場にも取り入れられている米国の弁論術と、遥か東方の中国の『史記』に登場する口舌の徒の弁論とが相通ずることに興味をそそられるのは、筆者だけであろうか。両者を即座に結びつけるのは短絡的に過ぎるが、本稿では敢えて両者の類似点に着目しつつ、試みに中国版弁論術を考察する。

1. 説得の論理の展開法

—— アカデミック・ディベートの3つの基本型

1.1 Need-Plan 型

Need-Plan 型というのは、新しい政策を導入しようとする際の、最もプリミティブな方法である。すなわち眼前に重大な問題があり、それを取り除くためにあるプランを提案する。その際問題の重要性³⁾、優先的に解決する必要性などを証明せねばならず、そのために現状の分析は不可欠となる⁴⁾。又、様々なデータによる理由づけ⁵⁾という手順も踏まねばならない。と同時に、プランが採用されたと

仮定して、そのプランが確実に実行に移せるものであるかどうかをチェックし⁶⁾、眼前の問題を必ず解決できるものであることを証明しなければならない⁷⁾。更に付加利益⁸⁾があれば尚よい。

一つ例を挙げてみよう。張儀が魏は秦の傘下に入るべきである、ということを主張し、魏王を説得しようとする場面。

1. 問題：秦が魏に攻め込もうとしている。
 - a. 秦とは既に戦って敗れ、曲沃と平周を取られている。再戦したが再び敗れた。(事実)
 - b. 斉にも攻め込まれ敗戦した。(事実)
 - c. 魏は戦場になりやすい地勢である。
 - d. 秦に逆い続ければ、秦は、魏の卷・衍・南燕・酸棗に出兵して占拠し合従の道を絶つだろう。
 - e. 魏は滅亡の危機にさらされている。
2. 原因：合従論者の言に惑わされ、信用のおけない蘇秦を頼みとする合従政策に従って秦に対抗できると考えるのが誤りである。

障害：魏王自身が秦に仕えるべきであるという張儀の主張を、今まで聴き入れてこなかった。
3. プラン：秦に服従する。
 - a. 従約を破棄する。
 - b. 秦が楚の国力を弱めるのに加担して、楚へ出兵する。
4. 問題解決性：秦に服従すれば、秦は魏に出兵しない。
5. 付加利益：(秦の進攻を防ぐことができるばかりか) 国家は安泰になる。
 - a. 魏が秦に仕えるようになれば、楚も韓も身動きがとれなくなる。
 - b. 楚と韓の心配がなくなれば、魏王も安心でき、国を脅かされる心配もない。

以上のような議論の運びが付加利益付きのNeed-Plan型である。張儀列伝全体の流れの中で読んでみると、議論というよりは半ば脅しに近いが、かくて魏国は蘇秦の進めてきた合従策に真先に背き、張儀の説く連衡策採用の第一号となった。件の一節は折しも、張儀が一時的に秦の宰相の座を去り、魏の宰相となって秦の

ために計り、魏を先ず秦に服従させてこれを機に六国合従を打破しようと目論んで、なかなか従おうとしない魏を戦禍に陥れた時だから、まさに Need-Plan 型にはうってつけである。張儀が自ら need（問題解決の必要性）をつくり出し、魏に仕掛けたのであるから、どのように議論を展開すればよいかは自明である。

1.2 Comparative-Advantage 型

Comparative-Advantage 型では、プランの生じる利益を強調するのが特徴である。現状に解決を要するような重要な問題がさしあたって生じていない場合でも、プランを採用すれば、現状と比較して時間的・経済的により効果的で優れているということを主張する。

例えば、今燕という国が秦との戦争に備えて軍備に力を入れているとする。ここで、秦との戦争のために軍備に国力を傾けるより、むしろ趙と同盟を結んで友好関係を築く方が得策だ、と説くのが Comparative-Advantage 型である。

1. 現状：燕は秦を重視する政策をとっている。

- a. 燕が目下他国から攻撃を受けずに安泰でいられるのは、実は趙のおかげである。
- b. 理由：趙が事実上の盾となっている。
- c. 秦と趙とは雌雄を争う大国である。
- d. 秦が実際に燕まで攻め込んでくる可能性はない。
- e. 理由：①秦は地理的に燕から遠く離れているため、攻め込むまでに時間と労力がかかる。

②たとえ燕の城を攻め落としたとしても保持が困難である。

- f. 趙は地理的にも燕に攻め込むのに有利である。

g. 故に秦を重視し、趙の存在を憂慮しない現状の政策は誤りである。

2. プラン：趙と従約を結ぶ。

- 3. 利益：天下はひとつにまとまって、燕国は他国に犯される心配がなくなり安泰である。

これは、蘇秦が六国合従の政策を実現するために、まず足掛りとして燕で説いたことである。丁度、まだ壊れていない車に乗っている中流階級の人に対して、新

車に買い換えるように勧めるセールスマンのようなもので、現状のままでも悪くはないが、新しいプランを採用すれば更に良くなることを強調して、相手に目先の利益に飛びつかせる。この場合も、燕は蘇秦に車馬金帛を与えて、従約の盟主となるべき趙へ赴くお膳立までしてやった。

1.3 Goal-Criteria 型

Goal-Criteria 型とは、現状では達成されない目標や、現状にはない新しい目標が達成されるべきであることを主張する際に、何らかの規準を設定して、その規準によって理想的な目標の達成を評価するというものである。

例えば、趙という国に、蘇秦がいよいよ六国合従の盟約を取りつけに行き、趙王を説得する場面では、この Goal-Criteria 型が有効に用いられている。

1. 達成されるべき目標：民を安んずること。

2. 規準：

- a. 外交関係を結ぶべき国を正しく選ぶ。
- b. 主君の位を重くする。
- c. 領地を広める。
- d. 兵を強くする。

3. なぜ現状では目標が達成できないか。

a. 外交関係を結ぶ国のバランスがとれない。

①秦・斉両国を敵にする。→民が安んぜられない。

②秦に依存して斉を攻める。→秦は韓と魏の弱体化を計る。

③斉に依存して秦を攻める。→斉は楚と魏の弱体化を計る。

④趙にとって韓と魏は秦に対する盾であるから両国が弱くなると不利である。

⑤楚が弱くなると援助が期待できず趙は孤立する。

b. 以上①～⑤のような状況の中で、自国の土地を割譲して秦に仕えようとする現状の体制が間違っている。

4. プラン：韓・魏・斉・楚・燕・趙の六国を合わせて秦に対抗する。

a. 人質を交換する。

b. 盟約を結ぶ。

- ①秦が楚を攻めた場合の援助体制。
- ②秦が韓と魏を攻めた場合の援助体制。
- ③秦が斉を攻めた場合の援助体制。
- ④秦が燕を攻めた場合の援助体制。
- ⑤秦が趙を攻めた場合の援助体制。

以上について細目を定める。

- ⑥諸侯でこの盟約に従わないものがあれば、五国で兵を出して伐つ。（罰則）

5. プランは規準を満たす。

- a. 外交相手を選ぶ心配がなくなる。
- b. 覇王の業が完成し、外戚の父兄も皆封侯を受け、主君の位が重くなる。
- c. 燕・斉・楚・韓・魏は、盟主の趙に各々特産物の産地を捧げて来る。
- d. 秦の軍隊は函谷関より東には出ようとしなくなる（から国力増強に専念できる）。

このようにして、天下の秩序を維持し、諸侯を安んじ、民を安んずるとの名目で、六国合従の盟約を諸侯と取り交す準備が完了したのである。大国趙を動かし、合従の盟主に祭り上げるには、理念的な Goal-Criteria 型の議論が最適と考えられ、蘇秦が他の五国に対するのとは異なるこの議論のパターンを選んだのは、非常に的を得ていると言わざるをえない。

以下、成功以前の蘇秦と張儀の弁論、成功に至る両者の論調、そして成功以後の弁論と、『史記』の記述に沿ってみていくことにする。

2. 成功以前の論調

面白いことに、蘇秦にしても張儀にしても、その策が採用される前には不遇の時代があるのだが、蘇秦の方は弁論そのものの拙劣さというよりは、諸般の事情がその原因であるような記述がなされている。一方張儀の方は、明らかに議論の不熟さによって論争に破れた様子がみてとれる。二人とも列伝の冒頭に鬼谷先生

に就いて学んだとあり、張儀列伝の冒頭には更に、

蘇秦自以不及張儀。

蘇秦は自分で張儀には及ばないと思った。

とある。しかし同じ張儀列伝に、蘇秦に利用され秦に仕えるように仕向けられたことに気づかず、やがて秦の恵王の客卿となり真相を知った張儀が、

嗟乎。此在吾術中而不悟。吾不及蘇君明矣。

ああ、これは私の学んだことの中にあつたはずなのに気づかなかつたとは。

私が蘇秦殿に及ばないのは明らかだな。

と言う場面がある。蘇秦が弁舌でうち立てた六国合従の体制を、後に同じ弁舌でつき崩していくのが張儀であるから、二人は互角のライバルで、弁舌の力量は甲乙つけ難いとはいえ、上記の引用文と、一度は連衡策を六国に採用させながらも、秦の恵王亡き後即位した武王との折り合いが悪く、そのために六国の信用を失い再び合従策にとってかわられてしまう⁹⁾ことを考えると、張儀の立場はやや劣勢である¹⁰⁾。

両者の弁舌を比べてみると、蘇秦は現状変革に対して肯定的 (affirmative) であり、その蘇秦との関係において、張儀の方は、建設的 (constructive) でありながらも常に否定的 (negative) である。この関係は、丁度ディベートにおける肯定側と否定側との関係に似ている。些か先走るが、このようにみていくと、張儀の議論は、いわば蘇秦の議論に対する Counter-Plan (否定側の提出する議論形式の一種¹¹⁾) とも考えられるのである。本来のディベートでは、肯定・否定両論が交互に提出されクロスするのだが、それが2つの列伝に分かれて行われていると考えられる。

2.1 蘇秦 — 三度の失敗

鬼谷先生のもとで学んだ後、国を出て遊説してまわったが、数年経って困窮して帰って来た。家族の者にまで笑われ謗られた蘇秦は発憤して部屋に閉じ籠り、書物を取り出してひと通り目を通した。その中からこれぞと思う書物を見つけ出

し、必死に読んだ。一年経ち、相手の心情を察し、言葉によって相手を動揺させる奥義を悟った。

曰。此可以説當世之君矣。

いわく、これで当世の君主を説得できるぞ。

ところが、すぐには採用されない。

求説周顯王。顯王左右素習知蘇秦。皆少之。弗信。

乃西至秦。秦孝公卒。説惠王曰。

秦四塞之國。被山帶渭。

東有關河。西有漢中。 } — ①
南有巴蜀。北有代馬。 }

此天府也。

以秦士民之衆。兵法之教。 } — ②
可以吞天下。稱帝而治。 }

秦王曰。

毛羽未成。不可以高蜚。

文理未明。不可以并兼。

方誅商鞅。疾辯士。弗用。

乃東之趙。趙肅侯令其弟成爲相。號奉陽君。奉陽君弗説之。

周の顯王に進言したいと申し出た。顯王の側近の者達は、平素から蘇秦のことを良く知っていたため、皆蘇秦を軽んじて信用しなかった。

そこで西へ赴き秦に至った。秦の孝公は亡くなっていて、恵王に進言した。

「秦は四方に要塞のある国です。山に囲まれ渭水が帯のように巡っています。

①東には関所と黄河が、西には漢中があり、南には巴と蜀が、北には代の馬があり、これは天から与えられた宝庫であります。②秦国の士や人民の数の多さと兵法の教えとをもってすれば、天下をまる呑みにし、帝と称して治めることもできるのであります。」

秦王はしかし、

「毛や羽が生えていなければ高く飛ぶことはできない。国内を治める法度教

化の条理が整わなければ他国を併合することはできない。」

と答えた。秦では折しも商鞅を誅したばかりで、弁舌の徒を嫌って任用しなかったのである。

そこで東に赴き趙に行った。趙の肅侯は自分の弟の成を宰相にし、成は奉陽君と呼ばれていた。その奉陽君が蘇秦を快く思わなかった。

一度目は故郷周の顕王に進言しようとしたが、日頃の蘇秦を知る側近達から軽んじられ不採用となる。二度目は秦の恵王だが、折が悪く弁士を疎んじている時だったため不採用となる。三度目は趙に行ったが、宰相奉陽君に気に入られず、肅侯への進言の道は開かれなかった。いずれも史記の記述からは、蘇秦に対する先入観や各国のお国事情によるもので、蘇秦の弁舌の拙劣さが不採用の原因だったとは思われない¹²⁾。それどころか、これ以後燕を足掛りに六国の従約を取りつける際の基本的なスタイルは、既に秦の恵王に説いた時の弁論にみられるのである。すなわち、①各国の地の利を東西南北に渡って例挙する。②「以〔国名〕之A（與）王之B」（〔国名〕のA、王のBをもってすれば云々）式に相手国を褒め王をおだてる。①の型は六国全てに対して用いられており、②の型は、そのバリエーションも加えると、韓・魏・斉・楚の四国に対して用いられている。これら2つの型は実際の地理に言及しながらも半ば社交辞令の美辞麗句である。後に張儀が、

夫從人飾辯虛辭。高主之節。言其利而不言其害。

そもそも合従を説く者は、言葉を飾りたて、中身のないことばかり言い連ね、主君の節度ある行為を称えますが、その利益を言ってもその害は申しません。

と批判するが、蘇秦の弁舌をこれ以上の確に総括することはできないほど言い得て妙である。「言其利而不言其害」というのは、まさに affirmative 的態度であるし、褒めて相手の気持ちを高揚させ、自分の説を受け入れさせるテクニックが所謂「揣摩」の奥義なのであろう。それに対して相手側の依って立つところ（この場合は蘇秦ひいては合従論者）の信憑性を疑わせ、不利益、すなわち「害」を言い、合従策を否定しながら自説を展開していく張儀の弁舌は、negative 的態度に他ならない。

2.2 張儀 — 司馬錯との論争に完敗

既に趙王を説得し合従の同盟を結び運びとなった後、秦が諸侯を攻めて同盟が破れ面目を失うのを恐れた蘇秦は、秦に任用されるべき人だと考えた末、張儀を動かすことにした。人を遣わして張儀をまず自分のいる趙に赴かせ、故意に彼を冷遇し、叱責して辱しめ、趙に対して怨みを持たせて、遂に秦に赴くよう仕向けた。そして張儀が秦王に任用されるまで人を遣わし援助した。秦王に客卿として任用され諸侯を伐つ謀に参与するようになった後、蘇秦の真意を知った張儀は、自分は新しく任用されたばかりで趙に手出しはできないし、ましてや蘇秦が健在でいるうちは口出しもできない、と蘇秦の使者に言って彼を帰すのである。この言葉通り、蘇秦の死を聞いた直後から、初めて公然と連衡策を説いてまわるようになる。

さて、今はまだ蘇秦が健在な時の話である。張儀が秦で宰相となった後、『史記』の張儀列伝でのデビュー戦は、司馬錯との論争である。苴と蜀とが互いに攻撃し合って、両方から秦に急を告げに来た。秦の恵王は出兵して蜀を伐とうとしたが、道が狭く険しく到達するまでが大変であると考えているうちに、韓も秦に侵入して来た。恵王は先に韓を伐ちそれから蜀を伐つか、蜀の方を先に伐つかで迷っていた。前者を採れば蜀の成敗が長引き不利に思え、後者を採れば韓が秦の疲弊したのを見て襲撃して来る恐れがある。司馬錯と張儀は恵王の前で論争した。

司馬錯欲伐蜀。張儀曰。不如伐韓。王曰。請聞其説。

司馬錯は蜀を伐ちましようと言う。張儀は、「韓を伐つ方が宜しいかと存じます。」恵王は「その理由を聞かせてもらおう。」と言った。

儀曰。

親魏善楚。—— ①

下兵三川。塞什谷之口。當屯留之道。—— ②

魏絶南陽。
楚臨南鄭。} ①

秦攻新城宜陽。以臨二周之郊。—— ②

誅周王之罪。侵楚魏之地。—— ②

周自知不能救。九鼎寶器必出。—— ③

據九鼎。案圖籍。挾天子。以令於天下。天下莫敢不聽。—— ③

此王業也。—— ④

今夫蜀。西僻之國。而戎翟之倫也。—— ⑤

敵兵勞衆。不足以成名。
得其地。不足以爲利。 } ⑤

臣聞。爭名者於朝。爭利者於市。—— ⑥

今三川周室。天下之朝市也。—— ⑥

而王不爭焉。顧爭於戎翟。—— ⑥ + ⑤

去王業遠矣。—— ④

張儀が言った。

「①魏と親しくし楚と関係を良くしておきます。②我が軍は三川を攻め下り、什谷の口を塞ぎ、屯留の道を押さえます。① 魏は南陽で（韓の上党への）道を絶ち、楚は南鄭に臨み（韓の南陽への兵を絶ち）ます。② 秦は新城・宜陽を攻めて東西二周の都の近くまで進み、② 楚・魏の地を侵したといって周王の罪を責めます。③周は当然援助は得られないとわかっていますから、九鼎の宝器を必ず出すでしょう。③ 九鼎を押え、地図と戸籍を取りおさえ、天子を抱えこんで天下に命令すれば、天下に従わないものはないでしょう。④これは王業であります。

⑤一方あの蜀は西の辺境の国で、戎翟^{えびす}の輩です。⑤ 兵を疲弊させ多くの民を疲労させても、名声を成すのに十分ではありませんし、その地を得たとしても、利益といえるほどでもありません。⑥『名を争う者は朝においてし、利を争う者は市においてす。』と聞いております。⑥ 今三川と周室は、天下の市と朝です。⑥ それなのに、王様はこれらを争おうとはなされず、反対に戎翟^{えびす}などと争われるとは。④ 王業から遠く離れてしまいます。」

張儀の議論のキーワードは「王業」（④ ④）である。ここで張儀は一種の value debate に持ち込んだのである。value debate というのは、例えば原子力発電所の是非について、人の健康や生態系の環境が大切か、電力資源確保と公共の利

益が大切な、といった価値判断を伴うものである。ここで張儀は「王業」に価値を認め、これを政策決定の規準として提出したのだが、これが、張儀がこの論争に敗北する原因の一つになっている。何故なら、張儀は王業を支えるものとして⑤から⑥にかけて「名」と「利」を得ることを説いたが、この名声と利益の内容を吟味してみると、司馬錯が後に主張することろと比べて明らかに劣っているばかりか、一般常識としての「王業」の理念とは自己矛盾^{セルフ・コントラディクション}を起こしてしまうからである。半ば脅嚇に近いやり方で鼎と地図・戸籍を取り上げ、天子を盾に天下を取ろうというのは、客観的に見ても王業とは相容れない。

第二の敗因は、議論の運び方の性急さとその展開のぎこちなさである。第5節で詳説するが、説得するにあたっては当然説得される相手、或は聞き手（この場合は秦の恵王）がいるわけだが、ここでの張儀の議論の仕方は一方的で、聞き手との交流を計ろうという態度がその言説に表れていない。①から③'までが具体的な戦略、④で「此王業也」と締めくくって、⑤で「今夫」と切り出して話題を一転蜀に向け、⑤から⑥'で蜀を伐つことの非を説き、最後に④'で「去王業遠矣」と結ぶ。この中で説得の常套的手段である固定的言説を含むのは、僅かに⑥の「臣聞」で導入される諺言のみである。

全体的には単刀直入、簡潔明瞭、理路整然としているが、いまひとつ説得力に欠ける。ケースとしてはComparative-Advantage型である。プランの導入があり（①～②'）、プランの生む利益が述べられ（③'④）、対極にある策との利益の比較がなされている（⑤～⑥'④'）。この議論の弱いところは、PMA(Plan-Meet-Advantage)といって、プランが確かに利益を生むものであるかどうかという論点である（③）。つまり張儀の提案する策が王業へと結びついていくものかどうかであるが、その点を司馬錯がうまく論破している。

司馬錯曰。

不然。—— ①

臣聞之。—— ②

欲富國者。務廣其地。— ①

欲彊兵者。務富其民。— ②

欲王者。務博其德。 — ③

②'

三資者備。而王隨之矣。— ④—

今王地小民貧。— ③

故臣願先從事於易。— ③—

夫蜀。西僻之國也。而戎翟之長也。有桀紂之亂。— ④

以秦攻之。譬如使豺狼逐羣羊。— ④—

得其地。足以廣國。— ①—
取其財。足以富民繕兵。— ②—

不傷衆而彼已服焉。— ⑤—

拔一國。而天下不以爲暴。— ①—
利盡西海。而天下不以爲貪。— ②—
而又有禁暴止亂之名¹³⁾。— ③—
是我一舉而名實附也。— ④—

今攻韓劫天子。惡名也。而未必利也。— ⑦

又有不義之名。而攻天下所不欲。危矣。— ⑧

臣請謁其故。— ⑧—

周。天下之宗室也。— ①—
韓。周之與國也¹⁴⁾。— ②—
周自知失九鼎。— ③—
韓自知亡三川。— ④—
將二國并力合謀。— ⑤—
以因乎齊趙。而求解乎楚魏。— ⑥—
以鼎與楚。— ⑦—
以地與魏。— ⑧—
王弗能止也。— ⑨—

此臣之所謂危也。— ⑧—

不如伐蜀矣。— ⑨

司馬錯が発言した。

「①そうではありません。②私の聞きますところでは、②『④国を富まさんと欲する者は、その地を広うせんことに務む。⑤兵を強うせん」と欲

する者は、その民を富ますんことに務む。㉔王たらんと欲する者は、その徳を博うせんことに務む。㉕三つの資備わりて、而うして王たることこれに随う。』と。㉖今王様の土地は僅かしかなく、民は貧しゅうございます。㉗それ故、私はまず易しいことから事をお始めになるのが宜しかろうと思います。

㉘そもそも蜀は、西の辺境の国でありまして、^{えびす}戎翟の頭です。そして桀や紂の起こしましたような乱が起きています。㉙ここに秦が攻め入りましたならば、^{やまいぬ}豺や狼が羊の群れを追うようなものです。㉚㉑その地が得られましたならば、十分国土を広めることができます。㉛その財を手に入れましたならば、十分民を富ませ、兵器を修繕することができます。㉜民衆を傷うことなく敵は降伏するでありましょう。㉝㉒一国を奪い取っても天下は暴虐とは考えますまい。㉞利益が西の果てまで達すほどでも天下は貪欲だとは言いますまい。㉟その上更に暴挙を禁じ混乱を止めた名声も得られます。㊱我が秦は一举兩得、名声と実益が得られることになります。

㊲もしも今韓を攻め天子を脅かせば、悪名を被ります。しかも必ずしも利益を得られるとは限りません。

㊳それに又、不義の名を被り、しかも天下の望まぬところを攻めるのは危険でございます。㊴その理由を申し上げます。㊵(1)㉑周は天下の宗室であり㊶韓は周の同盟国であります。(2)㉒周は九鼎を失うことが自明となり、㊷韓は三川を失うことを免れ得ないとわかれば、二国は力を合わせて共に謀るでありましょう。齊と趙に頼り、そして楚と魏に窮地を解くことを頼むでしょう。(3)㉓鼎は楚に与え、㊸土地は魏に与えることになりましたら、王様にはそれを阻止することはできますまい。㊹これが、私が危険だと申し上げた理由でございます。

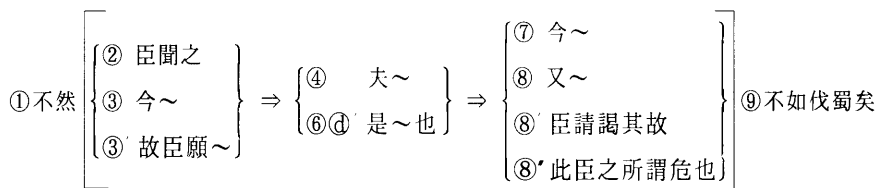
㊺蜀を伐つのが善策です。』

司馬錯の論の展開は Goal-Criteria 型である。goal は張儀の議論を受けて、天下に王たること、と設定し (㉒ - ㉕)、3つの criteria を設けている。すなわち ㉑国土を拡大して国を富ませること。㉒国民を富ませて兵を強くすること。そ

して㉔徳を広く施して王者の風格を備えることである。この3つが備われば、天下の王としての地位は確立されるということを、「臣聞之」(㉔)という言葉で導入する。まず始めに goal と criteria を明示した後で、現状(㉔)と小結論(㉔)を述べてひと区切りつける。そして㉔㉔㉔を満たすためのプランが検討される。ここでも張儀の議論の㉔を受けながら、張儀が「戎翟之倫」と言ったのを、「戎翟之長」と言い換えて、しかも蜀の地では誰の目にも明らかな乱が起きていることを付け加え、蜀を成敗する利点を説くその後の自分の議論を展開する糸口としている。㉔で蜀を伐つプランの実行可能性を証明して、㉔でPMC (Plan-Meet-Criteria)、㉔で Advantage (利益)について述べている。蜀を伐てば㉔㉔を満たして実益が得られるばかりでなく名声も一挙に手に入れられ、㉔を達成できる。㉔-㉔で「是～也」と一段落をつけて、次は張儀の策を採用した場合の Disadvantage (不利益)に言及する(㉔～㉔)。

Comparative-Advantage 型の議論を論破するにの最も威力を発揮するのが、この通称DA議論である。司馬錯はこの論点について非常に入念に議論している。「今」で張儀のプランの検討に入り、韓を攻め(張儀の㉔～㉔)周を脅かす(同㉔～㉔)ことは、悪名を被り、利益に必ずしも結びつかない。すなわち張儀の設定した value ㉔に反するばかりか、利益も生まない。そして更にはDAを生じするという訳である。まず張儀のプランのPMAを検討しておいてから、㉔で「危矣」とDAを提示している。このDAの証明が同時に張儀のプランに対するPMA議論も兼ねている点が巧妙である。以下「危矣」というDAに至るまでのステップが(1)から(3)の3段階に分けて明示される。その細目は㉔周、㉔韓の二点について説明される。この㉔の部分、㉔の「臣請謁其故」と㉔の「此臣之所謂危也」とで挟まれる形になっていて、よく整っている。最後に結論として㉔「不如伐蜀矣」で結び、最初の㉔「不然」と呼応して、司馬錯の議論は完結している。

これは、ディベーターの目から見ると、完璧なまでの Goal-Criteria 型議論であり、かつ張儀の論に対する非常に効果的な negative な議論である。更に論旨の展開という点からいっても、議論の流れを無理なく追え、かつ議論にめり張りをつける種々の用語が用いられており(㉔㉔㉔-㉔㉔㉔)、同時に自分の議論を聞き手に効果的にアピールする語句も用いられている。(㉔㉔㉔㉔㉔)。



(図1) 司馬錯の議論のストリーム

従ってこの論争の結末が、

惠王曰。善。寡人請聽子。

惠王が言った。「わかった。余はお前（司馬錯）の意見に従おう。」

となったのも宜なるかな、である。張儀の弁舌は、この時点では未だ本領を発揮するに至っていなかったのである。

3. 合従・連衡に至る論調

この第3節では、蘇秦を affirmative、張儀を negativeに見立てて、双方の議論をつき合わせていくことにする。概略、蘇秦は六国をおだてて、西面して秦に仕えることの非を説き、対する張儀は六国の欠点を列挙して秦がいかに強いかを述べ、加えて合従を説く人の信憑性を疑って、暫しと個人攻撃すれすれの議論を展開する。

<蘇秦>

- 相手国の国土・国力を称賛する。
(過大評価)
- 秦が攻め込む可能性を否定する。
(他国が盾になっていることを主張)
- 連衡論(者)、もしくは秦に仕えることの非を説く。

<張儀>

- ← ◦ 相手国の国土・国力を誹謗する。
- ↙ ◦ 秦の国力を誇示する。
- ← ◦ 秦がいつでも相手国を攻略できることを示す。
- ← ◦ 合従論(者)、或は蘇秦その人を非難する。

(図2) 蘇秦 v.s. 張儀の基本的構図

蘇秦は、燕から始めて、事実上盟主となるべき趙を入念に説得した後、日和見主義的な韓・魏・斉から畳み掛けるように各国のプライドを刺激して従約を取りつけ、最後に若干手強い大国の楚を説得して、合従完成に漕ぎ着ける。張儀は、蘇秦が存命のうちは蘇秦に対して遠慮があるため模様眺めをしているが、それでも単に手を拱いていたわけではなく、魏を合従の連合に背かせて六国合従突破の緒にしようとあれこれ策を巡らせたり、又楚・斉間の盟約を打破するために、楚に触手を伸ばして働きかけたりした。ここまでは試行錯誤だったが蘇秦が死んだと聞くやいなや、楚を合従の同盟から脱退させた。離反させやすそうな魏を手始めに、大物の楚を秦の側につけた後は、その勢いで韓と斉とを一気に秦に服従させた。そして、趙をも事実上の合従崩壊を盾に服従させ、最後の仕上げに、趙という大樹の陰に寄っていた燕を服従させた。六国の国の大きさや国情を考慮しながらも、基本的に説得の姿勢は変化しない蘇秦に対して、張儀は情勢が自分に有利になるにつれて強気になり、強引な論調がエスカレートしていく¹⁵⁾。

3.1 蘇秦の言説

まず、蘇秦がどの国へ行っても用いる手持ちの駒について整理しておこう。

- A. [国名]。東有[地名]。西有[地名]。南有[地名]。北有[地名]。(但し東西南北の順序は国によって全て異なる。)

機能：地の利を述べる。

燕：東北西南 趙：西南東北

韓：北西東南 齊：南東西北

魏：東西北南 楚：西東南北

- B. 地方～餘里。帶甲～萬。車～乗。騎～匹。粟支～年。

機能：国力の豊かさを述べる。

(地方)	(帶甲)	(車)	(騎)	(粟)
燕：二千餘里	數十萬	六百乗	六千匹	支數年
趙：二千餘里	數十萬	千乗	萬匹	支數年
韓：九百餘里	數十萬	——	——	——
魏：千里	——	——	——	——

齊：二千餘里 數十萬 —— —— 如丘山
 楚：五千餘里 百萬 千乘 萬匹 支十年

C. 形式不定（但し対句・連句多用）

機能：国の特色を述べる。

燕：土地が豊饒で「棗栗」の利がある。（食糧）

趙：_____

韓：天下の優れた兵器（「彊弓勁弩・利劍・堅甲」）の産地であり、それらを
 運用する兵卒は勇敢で健脚である。（兵器）

魏：人民が多く、車馬も多い。（^{マンパワー}人力）

齊：管仲の兵制に則った軍隊組織と、豊かで充実した暮らしに裏打ちされ、志
 気が高い。（兵力）

楚：_____

D. 此〔所謂〕〜也。

機能：国の利点を総括的に述べる。

燕：此所謂天府也。

趙：_____

韓：_____

魏：_____

齊：此所謂四塞之國也。

楚：此霸王之資也。

E. a) 〔国名〕。天下之彊國也。王。天下之賢君也。

b) 夫以〔国名〕之彊與大王之賢。

c) 天下莫能當也。

d) 今乃西面而事秦。

e) 臣竊爲大王羞之。

（但し a)〜e) の組み合わせ方や、用いる順序にはバリエーションがある。）

機能：秦に仕えるべきでないことを、相手国の王のプライドを刺激しながら
 述べる。

	a)	b)	c)	d)	e)
燕：	—	—	—	—	—
趙：	—	—	—	—	—
韓：	—	○	—	○	—
魏：	○	—	—	○	—
齊：	—	○	○	○	○
楚：	○	○	○	○	—

F. a) 故竊爲大王計。莫如～。

b) 臣聞。

c) 臣竊量。

d) 臣竊爲大王恥之。

e) 是故願大王蚤孰計之也。

f) 大王誠能聽臣。

g) 故敝邑趙王使臣效愚計。奉明約。在大王之詔詔之。

(但し a)～f) は類似した表現の中から一つの形を代表させたもので、様々なバリエーションがある¹⁶⁾。)

機能：主張の前後にあって、主張の内容を明確にする。

a)類 合従策を勧める際の前置きとする。

b)類 故事や引用句を導入する。

c)類 現状分析を導入する。

d)類 現状の政策の誤りや、不備、連衡論者の非を説いた後に用いる。

e)類 事態の正確な把握と新しい決断を促す。

f)類 PMA (合従策の採用から得られる利益)の議論を導入する。

g)類 説得の最後を締めくくる。

G. a) 夫衡人者～。

b) 是羣臣之計過也。

c) ～。無過此者。

機能：連衡策（論者）、又は秦に仕えることを勧める臣下を非難する。

燕：計無過於此者。

趙：夫衡人者。皆欲割諸侯之地以予秦。

韓：（パターンEと融合している。）

魏：夫挾彊秦之勢。以內却其主。罪無過此者。凡羣臣之言事秦者。皆姦人。
非忠臣也。

齊：夫不深料秦之無柰齊何。而欲西面而事之。是羣臣之計過也。

楚：衡人皆欲割諸侯之地以事秦。此所謂養仇而奉讎者也。

夫外挾彊秦之威。以內却其主。以求割地。大逆不忠。無過此者。

EとFは国によって、その議論の展開上、使い方は一様ではないが、これらの言説の基本的な機能はどの国でも共通している。

A～Dを見るだけでも既に六国の力関係が見えてくる。Aのパターンは、蘇秦が各国で開口一番口にする科白である。但し趙王を説得する時だけは、長い前置きがあってAでは話を切り出さない。そしてその前置きとは、以前趙に遊説に来たが採用されなかったいきさつと、大国としての趙の持つべき理念と、現状分析である。BはAに続いて述べられるフレーズである。一見形式的で内容のない虚辞にみえながら、趙と楚だけは明らかに国の規模に見合った扱いを受けている。更に趙と楚とが六国の中でも別格であるとわかるのは、Cの部分である。燕・韓・魏・斉に対しては、少しでもそれらの国を強大にみせようと、プラス α の評価を付加するために、食糧・兵器・人力・兵力などあれこれ持ち出して言及するが、誰の目にも明らかに大国である趙と楚に対しては、殊更に下駄を履かせる必要はないのである。Dの部分は、地理的に中原からはずれる燕・斉・楚についてのみ述べられている。燕と斉については辺鄙なところに位置する国を「天然の要塞」と美化しているが、楚については大国意識を刺激するためか、「霸王になるための資である」と更に美化している。

以上のA～Fに、連衡論者や臣下に対する批判(G)を加えた七点を軸に、各国の状況を踏まえた論点を盛り込んで、蘇秦の議論は構成されている。

3.2 張儀の言説

張儀についても同様に、その基本となる議論のパターンを確認しておく。

A. [国名]。地方不至～里。卒不過～萬。無～之食。

機能：各国の地理的弱点などを述べる。

魏：魏。地方不至千里。卒不過三十萬。

楚：_____

韓：韓地。…地不過九百里。無二歲之食。料大王之卒。悉之不過三十萬。

齊：_____

趙：_____

燕：_____

B. 秦。地半天下。…虎・賁之士百餘萬。車千乘。騎萬匹。積粟如丘山。

機能：秦の国力を誇示する。

魏：_____

楚：秦。地半天下。兵敵四國。被險帶河。四塞以爲固。虎賁之士百餘萬。車千乘。騎萬匹。積粟如丘山。

韓：秦。帶甲百餘萬。車千乘。騎萬匹。

齊：_____

趙：繕甲萬兵。飾車騎。習馳射。力田積粟。守四封之內。

燕：_____

C. 大王不事秦。秦下兵攻[地名]。

機能：秦に服従することを余儀なくさせる。

魏：大王不事秦。秦下兵攻[地名]。據[地名]劫衛取[地名]。

則趙不南。趙不南而梁不北。梁不北則從道絕。從道絕則大王之國欲毋危。不可得也。（芋づる式連鎖反応で魏を滅亡に追い込む。）

楚：大王不與秦。秦下甲據[地名]。韓之上地不通。下[地名]。取[地名]韓必入臣。梁則從風而動。秦攻楚之西。韓梁攻其北。社稷安得毋危。（韓・魏を傘下に入れて楚を攻撃する。）

韓：大王不事秦。秦下據[地名]。斷韓之上地。東取[地名]。則[地名]非王之有也。……不事秦則危。……雖欲毋亡。不可得也。（韓の要地を直撃する。）

齊：大王不事秦。秦驅韓梁攻齊之南地。悉趙兵渡清河。指[地名]。非王之

有也。國一日見攻。雖欲事秦。不可得也。（他国の兵を駆って齊を襲う。）

趙：_____

燕：今大王不事秦。秦下甲〔地名〕。驅趙而攻燕。則〔地名〕非王之有也。

（趙の兵を駆って燕を襲う。）

D. 今大王事秦。則～。

機能：秦に服従する利点を述べる。

魏：事秦則楚韓必不敢動。無楚韓之患。則大王高枕而臥。國必無憂矣。

楚：_____

韓：今王西面而事秦以攻楚。秦王必喜。

齊：_____

趙：_____

燕：今王事秦。秦王必喜。趙不敢妄動。是西有彊秦之援。而南無齊趙之患。

E. 今〔国名〕V～。〔国名〕V～。〔国名〕V～。〔国名〕V～。以事秦。

機能：かつて合従の従約を交した同盟国が既に秦の傘下に入ったことを述べて、相手国にも服従を促す。

魏：_____

楚：_____

韓：_____

齊：今秦楚嫁女娶婦。爲昆弟之國。

韓獻〔地名〕。

梁效〔地名〕。

趙入朝〔地名〕。割〔地名〕。

以事秦。

趙：今楚與秦爲昆弟之國。

而韓梁稱爲東藩之臣。

齊獻魚鹽之地。

燕：今趙王已入朝〔地名〕。效〔地名〕。

以事秦。

F. a) 故爲大王計。莫如～。

- b) 臣聞之。
- c) 此臣之所以爲大王患也。
- d) 是故願大王之孰計之。

(但し a) c) d) には若干バリエーションがある¹⁷⁾。)

機能：主張の前後にあって、主張する内容を明確にする。

- a)類 連衡策を勧める際の前置きとする。
- b)類 諺言・引用句、或は伝聞を導く。
- c)類 相手国の策を難じた後を受ける。
- d)類 議論にひと区切りつける。前にくる句は様々。

G. 且夫從人～。恃蘇秦。其不可成亦明矣。

機能：合従策（論者）、若しくは蘇秦を非難する。

魏：且夫諸侯之爲從者。～。

而欲恃詐僞反覆蘇秦之餘謀。其不可成明矣。

且夫從人多奮辭而少可信。～。

楚：且夫爲從者。～。

且夫從者。～。

夫從人。飾辯虛辭。～。言其利不言其害。

凡天下而以信約從親相堅者蘇秦。（蘇秦の略歴。）夫以一詐僞之蘇秦。而欲經營天下。混一諸侯。其不可成亦明矣。

韓：夫羣臣諸侯不料地之寡。而聽從人之甘言好辭。

齊：夫從人～。莫不以從爲可。

趙：凡大王之所信爲從者恃蘇秦。（蘇秦の略歴。）夫天下之不可一亦明矣。

燕：_____

AとBは相補的な関係にあると考えられるが、韓に対してはABを併用している点が注目される。司馬錯と論争した際に韓を攻めて周を脅すという策を提案した張儀の、韓に対する思い入れが感じられる。又このパターンは、齊と燕に対してはいずれも用いられていない。いずれも辺境の国という共通点がある。

CとDも対になっているが、どちらも趙に対しては用いていない点が注目される。やはり合従の盟主ということを意識してであろうか。又、楚に対してだけは

「不事秦」と言わず「不與秦」と言っている点に配慮が感じられる。魏と韓に対しては、別に「秦が本当に狙っているのは楚を弱めることである」と言い、楚に対しては「天下の強国といえば秦でなければ楚、楚でなければ秦。両国が争えば勢い両立はままならぬ。」と言っているように、蘇秦は趙を重視し拠点としたが、張儀は秦に依りながら、六国の中では楚を特別視していたということを示すものであろう。蘇秦が趙に対し入念に説得したように、張儀の場合も楚に対してはそのアプローチの仕方も、説得の仕方も他の五国とは別格になっている。Gでも4度も繰り返して合従策を非論する念の入れ様である。

EとGはCに加えて張儀が状況を見ながらその論調を変化させていく良い例である。Eでは四国目の斉から、自らの連衡政策が各国で採用された実績をアピールするようになる。ここでも楚に対してだけは、「服従した」とは言わず、「昆弟の国になった」と表現している。そして、この連衡策の実績によって自信をつけたかのように、Gの合従策及び蘇秦に対する酷評の口数が減っていくのである。魏と楚ではヒステリックなまでに必死で論難するのだが、段々と言葉数が減り、遂に燕ではひと言も論じない。又上述してきたように、楚と趙とは特別扱いで、両国では蘇秦の略歴を述べて、徹底的にその信憑性を失わせようと試みている。Fについては4つに分類してみたが、d)類の用い方が固定していない点が蘇秦とは異なる。又b)の表現も、諺言の他に同時に伝聞を導くのものにも使われており、全般的にFの表現は呼応関係が固定していないといえる。

以上A～Gの七点を軸に、各国の状況を踏えた論点を盛り込んで、張儀の議論は構成されている。

3.3 蘇秦 v.s. 張儀

ここでは、ディベートの flow sheet 式に、蘇秦の議論と張儀の議論を同時進行の形でつぎ合わせてみる。flow sheet とは、ディベートの進行を書き留めるノートのこと、論点や証拠資料（引用文）、証言者（出典）などを書き連ねて、議論の流れが一目でわかるようになっている。

3.3.1 燕

＜蘇秦＞ (1)¹⁸⁾

- 1 ¹⁹⁾ パターン { A. 地理
B. 国力
C. + α
D. 「此所謂天府者。」

プラスの評価

2. S.Q.²⁰⁾ (observation)

Q: 夫安樂無事。不見覆軍殺將。

↓ 無過燕者。大王知其所以然乎。

A: 夫燕之所以不犯寇被甲兵者。

以趙之爲蔽其南也。

(reason)

step 1) 秦趙五戰。秦再勝。而趙三勝。

step 2) 秦趙相斃。

step 3) 而王以全燕制其後。

Claim: 今燕にとって重要な国は
趙である。

① (If) 且夫秦之攻燕也。……

(Then) 秦之不能害燕亦明矣。

(ゆえに秦は燕に攻め込まない。)

② (If) 今趙之攻燕也。……

(Then) 不至十日而數十萬之軍軍
於東垣矣。

不至四五日而距國都也。

(ゆえに趙は燕に攻め込もうとす
れば容易にできる。)

③ 故曰秦之攻燕也。戰於千里之外。

趙之攻燕也。戰於百里之内。

3. S.Q.の政策を非難。(G')

夫不憂百里之患而重千里之外。

(趙)

(秦)

計無過於此者。

4. Plan:

是故願大王與趙從親。

＜張儀＞ (6)

← 2. evidence

昔趙襄子嘗以其姊爲代王妻。欲并代。

……乃令工人作爲金斗。長其尾。

令可以擊人。……

……於是酒酣樂。進熱噉。廚人進

斟。因反斗以擊代王。殺之。

↓ ……其姊聞之。因摩笄以自刺。

故至今有摩笄之山。

代王之亡。天下莫不聞。

← 1. S.Q. 大王之所親莫如趙。

← 3. Claim: 趙は信用できない。

夫趙王之很戾無親。大王之所明
見。

且以趙王爲可親乎。

(reason) 2 のエピソード

← 4. 実際にかつて趙に攻められ、二度

までも都を囲まれた。

趙興兵攻燕。再圍燕都而劫大王。

大王割十城以謝。

← 5. Claim: その趙ももはや秦と対等・

互角の立場ではない。百
里への患もない。

(observation) パターン E

1) 今趙王已入朝澠池。效河間。

以事秦。

AD :

step 1) 天下爲一 (PMA)

step 2) 燕國必無患也。

2) 且今時趙之於秦猶郡縣也。
不敢妄舉師以攻伐。

6. DA : パターンC

7. AD : パターンD

- ①西有彊秦之援。
- ②南無齊趙之患。

＜判定＞

- 現状分析：張儀に有利。(百里の患いであった趙の脅威はもはやない。)
- 利益の比較：蘇秦のAD＜張儀のAD (①が加わった分)

3.3.2 趙

＜蘇秦＞ (2)

0. オリジナルな前置き
(趙に対してのみある)

(起) 天下卿相人臣及布衣之士。

皆高賢君之行義。

皆願奉教陳忠於前之日久矣。

(承) 雖然。奉陽君妬而君不任事²⁰⁾。

是以賓客游士莫敢自盡於前者。

(転) 今奉陽君捐館舍。君乃今復與士民相親也。

(結) 臣故敢進其愚慮。

1. 一般論→国家の理念 (outline)

Claim : 竊爲君計者。莫若安民無事。

Inherency : 安民之本。在於擇交。

S.Q. : a) 齊秦爲兩敵而民不得安。

b) 倚秦攻齊而民不得安。

c) 倚齊攻秦而民不得安。

AD : ①割地包利

②封侯貴戚

2. S.Q. (observation)

①現状の危険性(1)

＜張儀＞ (5)

- step 1) 今大王與秦。則秦必弱韓
魏。與齊。則齊必弱楚魏。
- step 2) 魏弱則… } 此三策者。不可
韓弱則… } 孰計也。
楚弱則… }

②現状の危険性(2)

- step 1) 夫秦……則南陽危。劫韓
包周。
……則齊必入朝秦。
- step 2) 秦欲已得乎山東。則必舉
兵而讐趙矣。
……則兵必戰於邯鄲之下矣。
……此臣之所爲君患也。

③趙は大国である。

パターン { A 地理 } 山東之建國
 { B 国力 } 莫彊於趙。

プラスの評価

④近隣諸国は大切である。

Q. 秦之所害於天下者莫如趙。
↓ 然而秦不敢舉兵伐趙者。何也。
A : 畏韓魏之議其後也。
然則韓魏趙之南蔽也。

3. evidence

堯・舜・禹・湯王・武王の場合。
歴史上の名君が天下をとり、諸侯
に王として君臨し、天子として立
てたのは、「誠得其道也。」

Claim :

是故明主外料其敵之彊弱。
内度其士卒賢不肖。
不待兩軍相當。而勝敗存亡之機
固已形於胸中矣。
⇕
豈揜衆人之言而以冥冥決事矣。

← 2. S.Q.(2)事態は逼迫している。

← ① 今以大王之力。舉巴蜀。并漢中。
包兩周。守白馬之津。

← ② 今秦有敝甲凋兵。軍於澠池。
願渡河踰漳。據番吾。會邯鄲之下。
願以甲子合戰。以正殷紂之事。
敬使使臣先聞左右。

← 5. S.Q.(4)今や南敵はなくなった。
今秦發三將軍。

{ 其一軍塞午道。告齊使興師渡
清河。軍於邯鄲之東。
一軍軍成皋。驅韓梁軍於河外。
一軍軍於澠池。

4. Plan : 六國爲一。

(reasoning)

data : 諸侯之地五倍於秦

↓ 諸侯之卒十倍於秦

plan : 六國爲一。并力西鄉而攻秦。

↓

claim : 秦必破矣。

(significance)

夫破人之與破於人也

臣人之與臣於人也

豈可同日而論哉。

5. パターンG.

連衡策論者の非

6. Plan Planks

plank 1. 令天下之將相會於洹水之上。

plank 2. 通質

plank 3. 剝白馬而盟。

plank 4. 要約

plank 5. 罰則

7. Solvency :

六國從親以賓秦。則秦甲必不敢出於
函谷以害山東矣。

← 5. DA : step 1) 約四國爲一攻趙。

step 2) 趙敗。

step 3) 必四分其地。

是故不敢置意隱情。先以聞左右。

← 6. Plan :

臣竊爲大王計。莫如與秦王遇於滎
池。面相見而口相結。請案兵無攻。
願大王之定計。

← 3. パターンG :

合従論者・蘇秦の非。

PMA : 夫天下之不可一亦明矣。

← 4. S.Q. (3) パターンE :

合従は事実上破綻している。

← 1. S.Q.(1) これまで15年間の総括。

敝邑秦王使使臣效愚計於大王。

①大王收率天下以賓秦。

秦兵不敢出函谷關十五年。

②大王之威行於山東。敝邑恐懼懾伏。

[パターンB : 国力誇示]

愁居懾處。不敢動搖。唯大王有意督過之也。

〈判定〉

現状分析 : 張儀に有利。(蘇秦の論拠 2-④を崩し、合従体制下でも 2-②の
事態を発生させることができることを証明し、7の solvency が期
限切れでもはや蘇秦の plan が機能していないことを実証。)

言説 : 蘇秦 : 六国従約の長として、国家の理念を説く。

張儀：言葉遣いは他の五国に対するのとは明解に区別し、敬意を払っているようにみせながら、又趙国の意志を尊重しているようにみせかけながら、実は激しい脅迫。

理性v.s.感情で、ここは張儀に軍配が上がる。

3.3.3 韓

＜蘇秦＞ (3)

1. パターン { A. 地理
 B. 国力
 C. + α

プラスの評価

パターンE

a) 夫以韓之勁與大王之賢。

d) 乃西面事秦。

交臂而服。羞社稷。

而爲天下笑。無大於此者矣。

2. S.Q. Harm exists

step 1) 大王事秦。秦必求宜陽成皋。

step 2) 今茲效之。明年又復求地。

step 3) a) 與則無地以給之。

b) 不與則弃前功而受後禍。

step 4) 且大王之地有盡而秦之求無已。

step 5) impact : 此所謂市怨結禍也。

不戰而地已削矣。

3. evidence :

臣聞鄙諺曰「寧爲鷄口。無爲牛後。」

Claim :

[△]今西面交臂而臣事秦。

何異於牛後乎。

4. パターンE

a) 夫以大王之賢。挾彊韓之兵。

d) 而有牛後之名。

e) 臣竊爲大王羞之。

＜張儀＞ (3)

← 1. パターンA

マイナスの評価

← 2. 秦は圧倒的に強い。

パターンB + { 秦の国力誇示
 秦と韓の士卒の比較

{ 虎賁之士…至不可勝計。

{ 秦馬之良。戎兵之衆。…不可勝數。

山東之士…秦人…

[△]夫秦卒與山東之卒。猶孟賁之與怯夫。

以重力相壓。猶烏獲之與嬰兒。

[△]夫戰孟賁烏獲之士以攻不服之弱國。

無異垂千鈞之重於烏卵之上。

必無幸矣。

← 4. DA : パターンC

impact : 国が滅亡する。

← 5. Plan : 莫如爲秦。

6. AD : パターンD : 轉禍而說秦。

3. 合従策論者の非 (G)

<判定>

不利益の impact の比較：蘇秦のHarm<張儀のDA（秦に服従することによる
Harm v.s. 秦に服従しないことによるDA）

3.3.4 魏

<蘇秦> (4)

1. パターン { A 地理
 B 国力
 C + α

プラスの評価

臣竊量大王之國不下楚。

2. 夫挾彊秦之勢以內劫其主。
罪無過此者。

パターンE

- a) 魏。天下之彊國也。
王。天下之賢王也。
d) 今乃有意西面而事秦。
稱東藩。築帝宮。
受冠帶。祠春秋。
e) 臣竊爲大王恥之。

3. evidence :

越王句踐・武王の場合

敵を駆逐することができたのは、

↓「豈其士卒衆哉。誠能奮其威也。」

data :

↓ 今竊聞大王之卒。……

↓ 此其過越王句踐武王遠矣。

claim : 秦に服従するのは誤り。

今乃聽於羣臣之說而欲臣事秦。

Harm : 夫事秦。必割地以效實。

故兵未用而國已虧矣。

<張儀> (1)

← 1. パターンA

マイナスの評価

Claim :

梁之地勢。固戰場也。

reason : 1) 地四平。

2) 無名山大川之限。

3) 梁南與楚境。西與韓境。
北與趙境。東與齊境。

impact : step 1) 梁南與楚而不與齊。

則齊攻其東。

step 2) 東與齊而不與趙。

則趙攻其北。

step 3) 不合於韓。則韓攻
其西。

step 4) 不親於楚。則楚攻
其南。

此所謂四分五裂之道矣。

4. パターンG :

連衡策論者の非

凡羣臣之言事秦者。皆姦人。非忠臣也。

(reason)

- | | | |
|------|---|-------------------|
| 夫爲人臣 | { | 1) 割其主之地以求外交。 |
| | | 偷取一時之功。 |
| | | 2) 而不顧其後。破公家而成私門。 |

5. evidence :

周書曰「絲絲不絕。蔓蔓奈何。

豪毫不伐。將用斧柯。」

Claim :

前慮不定。後有大患。將奈之何。

6. Plan : 六國從親

AD : step 1) 專心并力壹意。(PMA)

step 2) 必無彊秦之患。

← 2. パターンG :

連衡策論者の非

蘇秦の非 : 其不可成亦明矣。

← 6. パターンG :

合從策論者の非

← 7. 臣聞之「積羽沈舟。羣輕折軸。

衆口鑠金。積毀鎖骨。」

← 3. DA : パターンC

impact : 梁の国が滅亡するのも
時間の問題

← 4. Plan : 莫如事秦。

5. AD : パターンD : 國必無憂矣。

step 1) 秦之所欲弱者莫如楚。

step 2) 能弱楚者莫如梁。

step 3) ①楚雖有富大之名而實
空虛。

②其卒雖多。然而輕走易
北。不能堅戰。

③悉梁之兵南面而伐楚。
勝之必矣。

step 4) 割楚而益梁。 } 虧楚而適秦。 } 嫁禍安國。 }	} 此善事也。
---	---------

(Additional Advantage)

<判定>

Harm : 蘇秦は秦一國を当面の敵とみなした。張儀は魏の國に固有な地理的弱点を
列挙することにより、敵は四方に多数あることを認識させた。

利益 : 蘇秦のAD<張儀のAD (蘇秦のプランは秦という Harm を取り除くだけだ

が、張儀のプランには、秦とも親しみ、諸国を抑え、しかも楚の地を割譲させて得るという付加利益ががつく。）

3.3.5 齊

〈蘇秦〉 (5)

1. パターン { A 地理
 { B 国力
 { C + α

プラスの評価

パターンE

- b) 夫以大王之賢與齊之彊。
c) 天下莫能當。
d) 今乃西面而事秦。
e) 臣竊爲大王羞之。

2. S.Q. 秦は齊を攻略することはできない。

且夫韓魏之所以畏秦者。爲與秦接

境壤界也。

(分析)

step 1) 兵出而相當。不出十日而
戰勝存亡之機決矣。

step 2) ①韓魏戰而勝秦。則兵半折。
四境不守。

②戰而不勝。則國已危亡
隨其後。

step 3) 是故韓魏之所以重與秦戰。
而輕爲之臣也。

今秦之攻齊則不然。

- 1) { ①倍韓魏之地。
 { ②過衛陽晉之道。
 { ③徑乎亢父之險。 }

→車不得方軌。騎不得比行。
百人守險。千人不敢過也。

- 2) 秦雖欲深入則狼顧。恐韓魏之議
其後也。

〈張儀〉 (4)

← 0. 天下疆國無過齊者。大臣父兄殷衆
富樂。

← 1. 然而爲大王計者。皆爲一時之說。
不顧百世之利。

パターンG:

合從策論者の非
莫不以從爲可。

- ← 2. Counter analysis

臣聞之。齊與魯三戰而魯三戰。

國以危亡隨其後。

雖有戰勝之名。而有亡國之實。

Q: 是何也。

↓

A: 齊大而魯小也。

今趙之與秦也。猶齊之與魯也²²⁾。

秦趙戰於河漳之上。再戰而趙再勝
秦。戰於番吾之下。再戰又勝秦。
四戰之後。趙之亡卒數十萬。邯鄲
僅存。雖有戰勝之名。而國已破矣。

Q: 是何也。

↓

A: 秦彊而趙弱也。

←言外のClaim:

秦と齊との関係は、秦と趙・齊と魯と
の関係と同じ。(秦>齊)

Claim : 秦之不能害齊亦明矣。

3. S.Q.の政策は誤り

夫不深料秦之無奈齊何。

而欲西面而事之。

是羣臣之計過也。

← 3. S.Q.パターンE

← 4. DA : パターンC

impact : 国の存亡が危い。

<判定>

現状分析 : 蘇秦の分析に対する張儀の Counter analysis が圧巻。(蘇秦は韓・魏 v.s. 秦と齊 v.s. 秦は異なると主張。張儀は齊 v.s. 秦は魯 v.s. 齊、趙 v.s. 秦と同じで前者が弱小、後者が強大と分析した。)

DA : 張儀の出したDA (パターンE) が効いている。

3.3.6 楚

<蘇秦> (6)

<張儀> (2)

1. パターンE a) 楚。天下之疆國也。
王。天下之賢王也。

パターン { A 地理
B 国力

プラスの評価

パターンE

b) 夫以楚之疆與王之賢。

c) 天下莫能當也。

d) 今乃欲西面而事秦。

則諸侯莫不西面而朝於章臺之下矣。

2. Plan : 莫如從親以孤秦。

(reason)

1) 秦之所害莫如楚。楚疆則秦弱。
秦疆則楚弱。其勢不兩立。

2) 治之其未亂也。爲之其未有也。

Claim : 患至而后憂之。則無及已。

3. AD : 從合則楚王。(衡成則秦帝。)

①令山東之國奉四時之獻。

← 1. パターンB 秦の国力誇示

← 2'. 大王之計過也。

今王不與猛虎而與羣羊。

← 3. 凡天下疆國。非秦而楚。非楚而秦。
兩國交爭。其勢不兩立。

← 4. DA : パターンC

impact : 国の存亡が危ない。

以承大王之明詔。

②委社稷。秦宗廟。練士厲兵。在大王之所有之。

③韓魏齊燕趙衛之妙音美人必充御宮。

④燕代橐駝良馬必實外殿。

4. パターンG

連衡策論(者)の非

step 1) 夫秦。虎狼之國。有吞天下之心。秦。天下之仇讎也。

step 2) 衡人皆欲割諸侯之地以事秦。此所謂「養仇而奉讎」也。

step 3) 夫爲人臣。…卒有秦之患。不顧其禍。

step 4) 夫外挾彊秦之威。以內劫其主。以求割地。大逆不忠。無過此者。

5. summary

故從親則諸侯割地以事楚。

衡合則楚割地以事秦。

此兩策者相去遠矣。

二者大王何居焉。

5. evidence : 兵不如者勿與挑戰。
粟不如者勿與持久。

← 2. パターンG

合從策論の非

且夫爲從者。無以異於驅羣羊而攻猛虎。虎之與羊不格明矣。

← 5. 合從策論者の非。

危亡之術也。
飾辯虛辭。

← 8. 蘇秦の非

a) 蘇秦の略歴

b) 夫以一詐僞爲蘇秦。而欲經營天下。混一諸侯。其不可成亦明也。

6. S.Q.

a) 秦は楚を攻めることができる。
(具体的攻略法)

秦兵之攻楚也。危難在三月之內。
而楚待諸侯之救。在半歲之外。
此其勢不相及也。
夫恃弱國之救。忘彊秦之禍。

b) 楚は今、兵卒も民も疲弊している。
evidence :

攻大者易危。而民敝者怨上。

Claim :

夫守易危之功而逆彊秦之心。
臣竊爲大王危之。

c) 秦と楚が共倒れするのは賢策では

ない。

①且[△]夫[△]秦之所以不出兵函谷十五年以攻齊趙者。陰謀有合天下之心。

②秦と楚は所謂「兩虎相搏」の関係。

③夫[△]秦楚相敵而韓魏以制其後。
計無危於此者矣。

7. Plan : PMA :

①秦下甲攻衛陽晉。→必大關天下之匈。

②大王悉起兵以攻宋。→不至數月而宋可舉。

AD : 舉宋而東指。則泗上十二諸侯。
盡王之有也。

9. Plan Planks

plank 1 使秦太子人質於楚。

plank 2 楚太子人質於秦。

plank 3 以秦女爲大王箕帚之妻。

plank 4 效萬室之都以爲湯沐之邑。

plank 5 長爲昆弟之國。

plank 6 終身無相攻伐。

<判定>

構 成 : 蘇秦 : 明確である。

張儀 : 1～5までは蘇秦の論に反駁することに注意をとられ、特に議論の合間をぬっては合従策論者を攻撃するため、焦点が不明瞭である。

建設性 : 蘇秦 : 六国合従実現の最後の関門で特に新しい議論はない。楚という大国に起因するADの大きさが特徴。

張儀 : 6～9が建設的。張儀にとっては楚が2つ目の国で、連衡のモデルにすべく力を入れ丁寧に論じている。

3.4 各国王の対応

蘇秦と張儀の説得の後、それらを受ける各国王の反応も又対称的である。

蘇秦の場合はいずれも王が非常に遜った態度で、まず「寡人年少。立國日淺。未嘗得聞社稷之長計也。」(趙)、「寡人雖不肖。必不能事秦。」(韓)、「寡人不肖。」

未嘗得聞明教。」(魏)、「寡人不敏。僻居守海。窮道東境之國也。未嘗得聞餘教。」(齊)、と教えを受けたことに対して感謝と敬意を表している。一番目の燕と最後の楚は王の対応が他の四ヶ国とは若干異なる。そして次に必ず「今」で始めて蘇秦の策を承諾する旨を表す。「今上客有意存天下。安諸侯。寡人敬以國從。」(趙)、「今主君詔以趙王之教。敬奉社稷以從。」(韓)、「今主君以趙王詔詔之。敬以國從。」(魏)、「今足下以趙王詔詔之。敬以國從。」(齊)、「今主君欲一天下。收諸侯。存危國。寡人謹奉社稷以從。」(楚)。又、燕王は「子必欲合從以安燕。寡人請以國從。」となっており、六国とも下線(一)を引いた部分はほぼ同じで、パターン化されているといつてよいであろう。ここで興味を引くのは、各国により承諾の動機が異なる点である。小国燕は「安燕」と自国の利益しか念頭にないのに対し、趙と楚は「存天下」・「安諸侯」(趙)、「一天下」・「收諸侯」・「存危國」(楚)という天下の公共の利益のためにという大義名分をもってその大国としての尊厳を示しながら承諾している。そして残りの中間の三国韓・魏・齊はいずれも趙王の權威に追従する形で返答している。

一方張儀の方は、始めの魏・楚・韓では王の言葉はない。齊・趙・燕はそれぞれの国の規模と国情に適した返答をしているが、ここで指摘しておきたいことは、魏を除いてはいずれも地の文が「許張儀」(楚・齊・趙)又は「聽儀(計)」(韓・燕)となっている点である。大国楚・趙と中の上に位置する齊は張儀に承諾を与えたと表現され、小国韓・燕は張儀の計に従った(聴き入れた)と表現されている。地の文の以上のような記述は、蘇秦の場合にはなかったものである。

更に、蘇秦の場合は「×王曰」と最初にあり前述の各王の言葉が続き、それでその話は完結するのだが、張儀の場合は、魏で王の言葉もなく「哀王於是乃倍從約而因儀請成於秦」で終わっているのを除き、楚では屈原と懷王がひとわり議論をした後初めて「故卒許張儀。與秦親。」の記述があり、齊では齊王の言葉があるが、その言葉の中には承諾の意を表すものはなく、言葉の後に「乃許張儀」となっている。又趙王は様々な言い訳を試み「心固竊疑焉。以爲一從不事秦。非國之長利也。乃且願變心易慮。割地謝前過以事秦。方將約車趨行。適聞使者之明詔。」と助辞を駆使して長々と承諾の返答をした後に「趙王許張儀」とあり、燕王も自分を赤子に喩えまでして、五城を秦に献じ服従することを約束すると言っ

た後に、「燕王聽儀」とある。韓だけが王の言葉もなくただ「韓王聽儀計」とのみある。これらの記述は、各王は蘇秦の「論」を信用し採用したのに対して、張儀の場合は張儀その人、或は論ではなく張儀の依っている秦国に対して反応しただけであることを示していると考えられる。ゆえに、後の張儀の秦王における信用が失墜した後はすぐに掌を返したように合従体制に戻ってしまったという記述と呼応しているのである。

4. 成功後の論調

蘇秦も張儀も誹謗されたという記述を境にその論調が変わる。従約が破れた後、蘇秦は二度にわたって説得のためにその弁舌を振う。一度目は、燕のために斉王に謁見した時で、斉に奪われた燕の十城を取り返すのが表向きの目的であるが、その向うには六国合従の立て役者蘇秦の面目と生命の危機が見え隠れしている。二度目には、上述の使命を果し燕に帰国したが復官されなかった時である。ここには人がたてた悪い評判が関係している。

人有毀蘇秦者。曰。左右賣國反覆之臣也。將作亂。

蘇秦を誘る者があった。「あちらこちらで国を売り、背き裏切る者です。今に乱を起こすでしょう。」

そこで燕王に対して自らの保身と復官のために熱弁を振う。これは明らかに、大義名分を背負ってする説得とは対極にある個人的な説得であり、政策論争ではないから、勢い理性よりは感情に訴えて燕王の心を動かそうという論調になる。アナロジーを多用する点がこれまでみてきた議論の立て方とは明確に異なっている。

一方張儀の場合にもやはり弁論の山場が2つある。張儀は連衡政策を成功させ、報告のため帰国の途についたが、秦の都咸陽に至る前に張儀を採用した恵王が亡くなり、武王が即位した。ところが武王は太子の時から張儀を嫌っていた。そこで武王が即位すると、群臣の多くは張儀を中傷するようになった。

羣臣多讒張儀。曰。無信。左右賣國以取容。秦必復用之。恐爲天下笑。

群臣は張儀を中傷する者が多く、「忠信の心がありません。あちらこちらで

国を売り、それで人に取り入る男です。秦が是が非でも張儀を再び任用すれば、天下の笑いの種になりましょう。」と言うのだった。

諸侯は、張儀が武王に重用されないのを聞くと、皆連衡の約束に背き、再び合従の体制に戻ってしまった。秦の武王元年、群臣が夜となく昼となく張儀を悪く言い、そこへ齊からも非難が届いたので、張儀は処罰されることを恐れて、東方で事を起こすことによって秦の利益を作り出す策を武王に説く。これは「張儀懼誅」とあるように、表向きは秦の利益を計ったように見えるが、実は保身のためである。それは、東方に赴いた後、齊に使者を出して齊王に言わせた2つめの弁論からも明らかである。ここではすでに議論というよりは心理作戦を弄する体のものである。秦王に説いた言葉をそのまま引用して、齊王に対して別の主旨で再利用するという、ディベート用語で言えば turn-around (相手の議論を自分に都合の良いように取り込むこと) に似ている。

4.1 蘇秦のその後

六国合従の同盟を結んで趙に帰った蘇秦は、趙の肅侯から武安君に封ぜられ、同盟の規約書を秦に送りつけた。こうして秦の軍隊が函谷関から外へ出ようとしなくなり、15年が過ぎた。

しかしその後、秦は犀首を遣わして齊と魏を欺き趙を伐たせ、合従を済し崩しにしようとした。齊と魏に攻められ、趙王は蘇秦に詰め寄った。蘇秦は恐れ、燕に遣いに出してもらえば必ず齊に報復するよう仕向けると申し出た。蘇秦が趙を去ると合従は解体してしまった。

時に燕の文侯が亡くなり、太子が後を継いだ。これが燕の易王である。易王がまだ即位したばかりの時、齊の宣王が燕の喪にかこつけて燕を伐ち城を十か所攻め取った。そこで易王はやって来た蘇秦を責めた。蘇秦がかつて燕に来た時、先生が車馬金帛の贈り物を調え趙に赴かせ、そのおかげで六国合従が成ったのに、今齊は趙を伐ち次に燕にも攻めて来た。蘇秦のせいで天下の笑い者になってしまった。燕のために侵略された土地を取り戻してくれるのか、と。蘇秦は大変恥じて、燕王のために取り戻しましょうと言って齊に赴き、齊王に謁見した。ここからが説得の場面である。

蘇秦見齊王。再拜。俯而慶。仰而弔。—— ①

齊王曰。
 是何慶弔相隨之速也。—— ⑦

蘇秦曰。
臣聞。飢人所以飢而不食烏喙者。爲其愈充腹。而與餓死同患也。—— ②

今燕雖弱小。卽秦王之少壻也。—— ③

大王利其十城。而長與彊秦爲仇。—— ④

今使弱燕爲鴈行。而彊秦敝其後。以招天下之精兵。—— ⑤

是食烏喙之類也。—— ⑥

齊王愀然變色。曰。

然則柰何。—— ①

①蘇秦は齊王に謁見すると、再拜し、②平伏して慶びを申し上げ、③顔を上げると弔を申し上げた。

齊王が言った。

「⑦何故たて続けに②慶③弔を申し述べるのだ。」

蘇秦いわく、

「②③飢えた者でも、飢えているからといって④烏頭の毒薬を食べない理由は、②かりそめに腹を充たしましても③餓死と同じ心配があるからだということでございます。

③さて④燕は弱く小さな国ではありますが、まぎれもない秦王の婿です。

④⑤王様が②燕の十城を手に入れられても、これから先長い間⑥強国秦とは仇になります。⑤今弱国燕を齊と並び歩ませれば、強国秦がその後を蔽い、ついには天下の精兵である秦の軍隊を招くことになりましょう。

⑥これは烏頭の毒を食べるのと同じことです。」

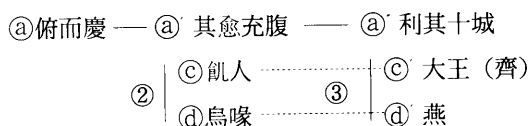
齊王は心配して顔色を変えた。

「①ではどうしたら良いのか。」

この蘇秦の話の切り出し方は非常に巧妙である。まず言葉による説得に入る前

に、異様な行為によって、これから説こうとする内容を謎かけの形で暗示させている。かつこの行為の意味を説明することが、とりもなおさず最後の目的、すなわち斉王に燕の十城を返還させること、を遂行するための布石になっている。そしてその説明の過程が、一種の謎解きになっているのである。①が問題で、⑦で何故か、と問うと、②で「臣聞」と喩え話を切り出す。つまり、「斉とかけて烏頭の毒を食らう飢えた人ととく。そのころは、一時の飢えを充たして死を招く。」というわけである。③で①と②との因果関係（inherency）を押えておいて、④で喩え話を現実に対応させる。⑤で④の招く結果をまとめてその不利益をいう。⑥で、「これが謎々の答えです」という仕立てになっている。しかも回答以上のメッセージを包有している。そこで斉王の⑦の質問が出てくるのである。

王の始めの質問⑦は、「慶」と「弔」との因果関係を問うものなので、③と④の部分で最も中心になる論点で、②はアナロジーによってその理解を助けるために導入された。大王（斉）と燕の関係は、飢えた人と烏頭の毒の関係に等しく、斉が燕を犯すことは、飢えた人が烏頭を食べることに等しく、一時の欲（飢え）を充たしても、後に大きな患い秦軍（死）がやってくる。図示すると図3のような関係になっている。



⑥仰而弔 — ⑥ 與餓死同患 — ⑥ 與彊秦爲仇

- { ②烏頭は毒→飢えた人がこれを食べる→死
 { ③燕は秦の婿→斉がこれを犯す→秦軍の攻撃

（図3）

さて、そこで事態の不利を理解した斉王に対して、

蘇秦曰

臣聞。古之善制者。轉禍爲福。因敗爲功。—— ①

大王誠能聽臣計。即歸燕之十城。—— ②

燕無故而得十城。必喜。

秦王知以己之故而歸燕之十城。亦必喜。 — ③

此所謂弃仇讎而得石交者也。 — ④

夫燕秦俱事齊。則大王號令天下莫敢不聽。 — ⑤

是王以虛辭附秦。以十城取天下。 — ⑥

此霸王之業也。 — ⑦

王曰。

善。 — ⑧

蘇秦が言った。

「①古のよく事を制する者は、禍を転じて福となし、敗によりて功をなすということです。

②王様がもし私の計画を聞き入れて下さるというのであれば、すぐに燕の十城を返還なされませ。③燕は故なくして十城を得れば必ず喜びましょう。

秦王は自分のお蔭で燕が十城を取り戻したと知れば、やはり必ず喜びましょう。④これは敵を忘れ石のように堅い交りを結ぶ、というものです。

⑤もしも燕と秦とが共に齊に仕えとなれば、王様が天下に号令なされても従わないものはなくなるでしょう。⑥これは、王様が虚辞で秦を従わせ、たった十城で天下を取るということです。⑦これぞ霸王の業でございます。」

齊王が言った。

「⑧わかった。」

このようにして蘇秦は首尾良く燕の十城を取り戻した。説得の前半で、燕を毒葉になぞらえ、齊の受けるダメージを死に喩えたことで、齊王はよほど動揺したらしく、「(愀然變色)」、この後半部分の論理の飛躍と、前半部分に隠されていた独断 (assertion、証拠で実証されていない主張) とを見抜くことができず、ただひと言「善」と言って蘇秦の提案を承諾してしまうのである。

ここで蘇秦の議論の前半と後半とを通してみておく。前半部分で、齊が燕の十城を奪った非を説くために、アナロジーを用いた (②)。アナロジーは、特に感情に訴え聞き手に強いインパクトを与えるのに有効な手段である。しかし、燕を犯せば秦を敵に回すことになる (④) という点は、③の因果関係の議論によって

バックアップされていると一応考えるとしても、そのために秦の軍隊が攻め寄せてくる(⑤)という事態が起こるかどうかは十分証明されておらず、蘇秦の assertion である。秦の言質がとってあるとも、秦が兵を動かす気配があるとも言っていない。(或は、齊王の説得に失敗した場合には、③の関係を根拠に秦を動かすに行く算段だったかもしれない。)しかし、齊王は善後策を求めた。現状の生み出す不利益が承認されたということである。そこで後半、具体的プランとそのプランに付随して生じる利益が述べられる。前半①で「禍を転じて福となす」と布石が敷いてあるためプランは簡単。先に奪った十城を燕に返せば良いのである(②)。そうすれば、燕も喜び秦も気を良くする(③)という利益が得られる。ここまでは問題ないのだが、その後の付加利益には飛躍がある。この論理の飛躍を一転して容易にしたのは、④の「此所謂」である。この一句で問題は氷解、一気に⑤を主張してしまう。燕に僅か十城返しただけで、燕と秦とが「齊に仕える」という関係になるかどうかは、^{かたき}敵を忘れるのとは別問題であるのに、その仮定 (assumption) を前提に、更に齊王が天下に号令すれば従わないものはない、と息巻き、遂にこれは「霸王之業」であるとまで言ってしまう。齊王が恐怖に捕われ頭に血が昇っているのを見てとってか、いくら功を焦っているからとはいえ、これは調子に乗りすぎである。

この議論は Comparative-Advantage 型である。秦が齊に攻めて来た、という問題が実際に起きているわけではなく、燕の十城を奪ったままという現状が続けると悪い事態を招きかねないので、新しいプランを採用し、現状の悪化を回避して、大きな利益を得ることを勧める。しかし上述したように、齊王には受け入れられたが、この議論は inherency と PMA の論証が不十分で、出来の悪いまやかしいものである。だからこの直後に人から誹謗されるのも当然と思われる。

蘇秦は罪を得ることを恐れて燕に帰ったが、燕王はもとの官職に復帰させなかった。そこで、

蘇秦見燕王曰。

臣東周之鄙人也。無有分寸之功。而王親拜之於廟。而禮之於廷。—— ①
今臣爲王卻齊之兵。而得十城²³⁾。宜以益親。—— ②

今來而王不官臣者。人必有以不信傷臣於王者。—— ③

臣之不信。王之福也。—— ④

臣聞。

忠信者。所以自爲也。—— ①

進取者。所以爲人也。—— ②

且臣之説齊王。曾非欺之也。—— ③

臣弃老母於東周。—— ④

固去自爲而行進取也。—— ③ + ④

今有孝如曾參。廉如伯夷。信如尾生。

得此三人者。以事大王。何若。

王曰。

足矣。—— ⑦

蘇秦曰。

孝如曾參。義不離其親一宿於外。—— ③

王又安能使之步行千里。而事弱燕之危王哉。

廉如伯夷。義不爲孤竹君之嗣。不肯爲武王臣。不受封侯。

而餓死首陽山下。—— ④

有廉如此。王又安能使之步行千里。而行進取於齊哉。

信如尾生。與女子期於梁下。女子不來。水至不去。

抱梁柱而死。—— ⑤

有信如此。王又安能使之步行千里。卻齊之彊兵哉。

臣所謂以忠信得罪於上者也。—— ⑦

蘇秦は燕王に謁見して申し立てた。

「①私は東周の卑しい者であります。一寸一分の功ありませんのに、王様は親しく私をみたまや廟にて拜して下さり、朝廷にて礼遇して下さいました。②今回私は王様のために齊の兵を退けて十城を得ましたので、より一層親しんで下さるはずだと思っておりました。③ところが今こうして参上しましたのに、王様が私に官職を下さらないのは、私のことを信義の心がない者だと、王様に中傷した者がいるからでございましょう。

④私に信義の心がないという評判は、王様にとっては幸いであります。⑤

私が聞き及んでおりますところでは、『④忠信は自分のため、⑥進んで事を行うのは人のため』とか。⑤' そもそも私が齊王を説得いたしましたのは、④' 決して欺いたわけではありません。⑥' 私は年老いた母を東周に残して参りましたが、これは言うまでもなく、④' 自らのためにする心を取り去って⑥' 進んで人のために事を行なったのです。

⑥' もしも③曾参のような孝行者、④' 伯夷のような清廉の人、⑤' 尾生のような信義厚き者がおりまして、この三人を得まして大王様に仕えさせましたら、いかがでしょうか。」

王いわく、

「⑦満足である。」

蘇秦はそこで言った。

「⑥' - 1 ③' 曾参のような孝行者は、義としてその親元を離れて外に一泊もしますまい。王様はそれを又どうやって千里の道を歩かせて、弱国燕の危うい王に仕えさせられます。⑥' - 2 ④' 伯夷のように清廉な者は、義として孤竹君の後を嗣がず、武王の臣にもなろうとせず、封侯も受けずに首陽山の下で餓死いたしました。このように清廉な者を王様は又どうやって千里の道を歩かせ、齊へ進んで赴き王様のために働かせることができましょうか。⑥' - 3 ⑤' 尾生のように信義を守る者は、女と橋のたもとで会う約束をして、女が来なくて川の水かさが増しても約束の場を去らず、とうとう橋の柱を抱いたまま死んでしまいました。このような信義の者を、王様は又どうやって千里の道を歩かせ、齊の強兵を退けさせることができましょう。⑦' 私はいつてみればそれなりに忠信でありながら王様から罪を被ったというものであります。」

蘇秦の用意周到なところは、①で、よそ者ながら燕王に重用されてきたことを念押しし、②で今回の功績を簡潔に述べて益々親しまれて然るべきだとして、自分の信用復活に必要な駒をまず最初に並べている点である。⑤と⑤' の議論は①を踏まえて展開されており、②は⑥' - 1.2.3 において巧みに取り入れられ反覆され、功績の大きさが増幅されている。

以上の蘇秦の弁明は、煎じつめれば、益々重んじられて然るべきなのに、忠信

でありながら不当に罪を被った、ということになろう。しかし、ここでは「忠信」という言葉をめぐって、蘇秦は非常に微妙で苦しい議論を強いられている。「不信」と誹謗されたことを即座には否定せず、一度は「不信」をそのまま受けとめている(③④)。そして「忠信」「不信」の言葉の定義を微妙にずらしていき(⑤～⑥)、最後には自分は「忠信」である、と主張する(⑦)。すなわち「不信(＝欺人)」対「忠信(＝孝・廉・信・義)」の二項対立から、「忠信」の中に段階を認め、「自爲(＝孝・廉・信・義)」対「爲人(＝進取、「非自爲」という意味での不信)」に移行する。⑤－⑥で純粹に忠信に徹する者は自らのためにする者であると定義し、徹頭徹尾忠信である例として⑥－⑦⑧⑨で曾參の「孝」、伯夷の「廉」、尾生の「信」を列挙する。一見価値あるものにみえる純粹な忠信が、燕王のような立場にある君主にとって有用かどうかを⑥－1.2.3で検証する。ここでは自分の功績を巧みに盛り込んで、自分がその成果をあげたのは適度の忠信であって、その忠信の微妙なあり方ゆえに罪を得たと主張するのである(⑦)。

このような一見常識に反する複雑な議論は、一度聞いただけでは理解できないであろう。当然燕王は、

若不忠信耳。豈有以忠信而得罪者乎。—— ①

①お前は単に忠でも信でもないだけだ。忠信であって罪を得るなどということがあるはずがない。

と反論する。「忠信」と「不忠信」の二項対立で考える限り、「得罪」と結びつくのは「不忠信」の方である。

しかし、ここで蘇秦は待ち構えていたかのように勢いづく。何故なら、燕王の関心が専ら⑦に集中してしまったため、⑦を証明しさえすれば、全ての問題が解決し、蘇秦はこれ以上の議論を待たずに汚名を返上し、その功績も認められ復官できることになるからである。

蘇秦曰。

不然。—— ①

臣聞。客有遠爲吏。而其妻私於人者。—— ②

其夫將來。其私者憂之。妻曰。勿憂。吾已作藥酒待之矣。居三日。其夫果

至。妻使妾舉藥酒進之。——③

妾欲言酒之有藥。則恐其逐主母也。——①

欲勿言乎。則恐其殺主父也。——②

於是乎詳僵而弃酒。——④

主父大怒。答之五十。——⑤

故妾一僵而覆酒。——③

上存主父。——②

下存主母。——①

然而不免於答。——⑤

惡在乎忠信之無罪也。——⑥

夫臣之過。不幸而類是乎。——⑦

燕王曰。

先生復就故官。——⑧

蘇秦が言った。

「①そんなことはありません。

②こんな話を聞いたことがございます。家を離れ遠方で役人をしている者があり、一方その妻は人と密通しておりました。

③件の夫がもうすぐ帰って来るというので、その密通していた男が心配しますと、妻は、「心配しないで。私がとくに毒藥の入ったお酒を作って待っているから。」と申しました。三日たつと、はたしてその夫が帰って来ました。妻は妾に毒酒を持たせ夫に勧めさせました。

④①妾は、酒に毒が入っていると云おうとしましたが、それでは本妻を追出すことになると考えました。②かといって言わずにいれば、今度は主人を殺すことになってしまいます。③さてそこで、わざと転んで酒を棄ててしまいました。④主人は大変怒って妾を五十回も笞打ちしました。

④ ③ さてこの妾が転んで酒をひっくりかえしたことで、② 上は主人の命を救い、① 下は本妻の身を助けました。⑤ それでありながら笞打たれることは免れ得ませんでした。⑥ 忠信であれば罪を得ることは絶対にな

いと言えるでしょうか。⑥そもそも私の受けた咎も、不幸にしてこの話の類ではありませんか。」

燕王が言った。

「㊟先生はまた元の官職につかれよ。」

ここでは、蘇秦の精力は議論よりも、いかに巧みなストーリーテラーを演ずるかに注がれている。①～⑤で話を終始一貫させ、⑥で再度我が身が不当に罪を受けていることをアピールする。②では例によって「臣聞」で話を説き起し、これから語る話の状況設定をする。ここまでの登場人物は「客」「其妻」「人」の三人で、語り手として蘇秦は中立的態度である。次の場面③では、「妻」を中心に話が進み、「其夫」「其私者」に加えて「妾」が登場する。④からは一転して「妾」が話の中心になる。今まで「(其)妻」と呼ばれてきた人は妾の立場から「主母」と呼ばれ、「其夫」は「主父」と呼びかえられる。㉔㉕で“To tell, or not to tell, that is the question.” 式の二項対立で悩むが、妾は㉔でも㉕でもない、別の次元の解決策㉖を見出す。しかし罰を受ける(㉔)。妾は主人に対しても本妻に対しても、同時に「忠信」であり「不信」であった。酒をこぼした(そして本妻の企てを裏切った)という意味では「不信」と思われても仕方がない。しかし、全ての事情を知り判断できる聞き手の立場からは、妾の行為は「忠信」としか映らないであろう。そこで蘇秦は、妾の立場を擁護しながら㉔でこの話を整理し、より忠であり信であるために選択した行為が、小さな「不信」のかどで罰を受けた、とするのである。⑤は燕王の発言㉔に対する回答。そして⑥のひと言でアナロジーは完結し、蘇秦は見事に燕王から㉕の言葉を引き出して、以前にも増して厚遇されたのである。

こうしてみると、成功後の蘇秦の弁舌は、正当派の議論と比べると、アナロジーへの依存が過剰であり、又多少の議論の乱れがみられ、それが蘇秦の終焉への前兆とも感じられるのである。

4.2 張儀のその後

秦の武王元年、群臣の中傷は止まず、齊からも張儀を任用している秦を責める使者が来て、身の危険を感じた張儀は最後の策を弄する。

乃因謂秦武王曰。

儀有愚計。願效之。—— ①

王曰。

奈何。—— ⑦

對曰。

爲秦社稷計者。東方有大變。然後王可以多割得地也。—— ②

今聞齊王甚憎儀。^①—— ③

儀之所在。必興師伐之。—— ④

故儀願乞其不肖之身之梁。齊必興師而伐梁。—— ④'

梁齊之兵連於城下。而不能相去。—— ②'

王以其間伐韓。入三川。出兵函谷而毋伐。以臨周。祭器必出。—— ⑤

挾天子。按圖籍。此王業也。—— ⑥

そこで、齊から非難がとどいたのを機に、秦の武王に申し上げた。

「①私に拙策があります。どうか申し上げることをお許し下さい。」

王が言った。

「⑦どのようにするのか。」

答えて言った。

「②秦のお国のためを考えますと、④東方に大きな事変が起きれば、⑤その後で王様は沢山の土地を割き手に入れることができますよ。

③今聞きますところでは、齊王が甚だ私を憎んでいるとのこと。④私の居ります所、必ず軍を興して伐ちに来るに違いありません。④'そこで、私不肖の身を捧げて梁へ参らせていただきとうございます。齊は必ず軍を興して梁を伐ちましょう。

⑤②' 梁と齊の軍隊は城下で布陣したまま引くに引けなくなります。⑥'王様はその隙に韓を伐ち、三川に入ります。兵を函谷関より出しますが、征伐はしないで周の近くまで迫ります。そうすれば必ず祭器を出すでしょう。⑥天子を抱え込んで地図と戸籍が手に入れば、これこそ王業であります。」

ここで注意すべきことは、以前張儀が恵王の御前で司馬錯と論争した際に提出した策を、放棄せず再び持ち出した点である。⑤と⑥の部分は2.2でみた張儀の議論の②③③'④とほぼ同じである。前回と異なるのは、今回は相手が武王であり、論敵がおらず、楚と魏を動かす代りに齊が己を憎んでいるのを利用し、自分の身を投じて東方に事変を起そうと提案した点である。

前回に比べて改善された点は、全体の論の運び方である。①で遡ってワンクッション置き、②で秦のために計ることを強調して、まず計画の概略を述べる。具体策に入るのは⑤からで、その前には⑤が実行可能となる前提③～④を押さえておき、PMAの議論に備えてある。そして⑥がいかにも自然な結論のように思わせている。これは以前の性急で強引な論旨展開と大きく異なっている。又、自らを「臣」と言わず「儀」と言う点も今までのあり方とは異なる。しかしながら、秦の朝廷におけるデビュー戦と引退戦とが、終始一貫して同じ主張であるのは興味深く、ここでも又、張儀の最期が遠くないことが感じられる。

以上で張儀自身の議論が直接その口から聞かれるのは最後となる。張儀が梁に入ると、予想通り齊が兵を興し梁を伐とうとしたため、梁の哀王が恐れた。張儀は、「心配なさるには及びません。齊の軍隊を引き挙げさせて差しあげます。」と言うと、侍者の馮喜をいったん楚に遣わし、楚の使者という体裁をつくらせて齊へ行かせ、齊王に謎をかけた。

王甚憎張儀。雖然。亦厚矣。王之託儀於秦也。

「王様は甚だ張儀を憎んでいらっしゃいます。それでいながら、張儀が秦に信任されるようにとの王様のお心遣いは、また厚いことですね。」

「雖然」以下が、齊王には解せない。そこで

寡人憎儀。儀之所在。必興師伐之。何以託儀。

「余は張儀を憎んでおる。張儀のいる所は必ず兵を出して伐つ。張儀を信任させるはずがない。」

と言う。これで齊王は張儀の仕掛けた策略にはまったことになる。前半は先の張儀の発言③④そのままである。その言葉尻をとらえて使者は言う。

是乃王之託儀也。夫儀之出也。固與秦王約。

それこそ他でもない、王様が張儀を信任させておられることなのです。そもそも張儀が秦を出たのは、もとより秦王との約束があつてのことです。」

とここで種を明し、先の張儀の科白②～⑥そっくりそのまま繰り返し伝える²⁰。そして、

今儀入梁。王果伐之。是王内罷國。而外伐與國。廣鄰敵以內自臨。而信儀於秦王也。此臣之所謂託儀也。

「さて張儀が梁に入りますと、予想通り王様は梁を伐とうとなさいましたが、これは王様が内は国を病弊させて、外は同盟国を伐つこととなり、隣国の敵を広めて、国内に攻め込まれる危険を自ら招くことになります。一方張儀は秦王に信任されましょう。これが私が張儀を信任させると申し上げたことです。」

この最後の一文で、始めの謎めいた言葉の意味がはっきりした。自分の行為が自国には弊害をもたらし、しかも張儀に利益を与えると理解した齊王はすぐさま兵を引き挙げさせた。かくて張儀は保身に成功した。相手の意表を衡く細工をするところは、蘇秦が齊王に説いたやり方と似ている。同じ手を食わされたのは又しても齊王であった。張儀の最後の試みは最早議論ではなく、一種の言葉によるトリックである。

5. 説得の言語

今まで既に見てきたように、説得の文章には、地の文とは異なった言葉の上での特徴がある。それらの言葉があるために、全体としてそれが説得の文章であるという判断ができる。説得の文章に多く用いられている言葉には、論理の展開にめり張りをつけるもの、説得する人の姿勢を暗示するもの、或は常套句の利用によって説得のパターンをつくっていくもの等、様々な働きが認められる。それらは蘇秦列伝にせよ張儀列伝にせよ、説得の文章が“会話文”であり、話し言葉のある種の息遣いが存在することと相俟って、独特のスタイルを作り出していると

考えられる。

5.1 論理展開の“つながり”

第一に取り上げなければならないのは、論理を展開していく際の“つながり”をつくる語群である。これは 1) 新しい論点を導入するもの、2) 順接（前を受けて後ろにつなぐもの）、3) 転折（前後相反する内容をつなぐもの）、4) 論旨をまとめるもの、の4つに大別できる。

第一のグループには、「夫、凡、今」がある。「夫」の用法には、①「夫～者。…知其所以乎。」「夫～者。以（爲）…也。」のように、「夫～者。」で問題を設定して、説明を加えようとする場合がある。又、②「夫～。…者。」の形で、新しい定義や原理を導入する。話題の転換として或は新しい争点に注意を促すために最も多く用いられる形は、③「夫～[者] …。」で「～についていえば」、「～はといえば」ほどの意を表す。蘇秦の楚王に対する説得の最後の部分には、「夫～。夫～。夫～。」と三度も続けて用い、畳みかけるように「故（ゆえに）」で一氣に結論に持ち込む場面がある。又特徴のある用法としては、④「夫～。則…。」で仮定を導入するものと、⑤「夫A[之]與B[也]。[猶]C之與D[也](A : B ≡ C : D)。」の形で比喩を導入するものがある。「且夫」を用いて前段と関連を保ちながらも、若干の分断をつくり、仮定を導くものもある。又、先に大別した用法では、四番目のまとめの用法に含まれるが、「夫～。」の後に必ずパターンF又は判断文又は「矣」を伴って段落をしめくくるものがある。但しこれは張儀の言説にしかみられない。蘇秦の場合は結論を導く場合には「故夫～。～也。」のように「故」を伴う。

「凡」は張儀の言説にしかみられない。「凡～[者]。…。」で、既知の事実を改めてとり上げて言葉で説明を加えようとする場合に用いられている。三例あるうちの二例はいずれも、合従策論者の信憑性を失わせるために蘇秦の生涯を引きあいに出して批判を加えるもので、残りの一例は、楚王に対して「凡天下之疆國。非秦而楚。非楚而秦。……」といわずもがなのことを故意に言葉にし、秦と楚が両虎相立たず、の関係であることを言っている。

「今」は、①純粹に現在の事態を述べるのが基本で、そこからデータを導くこ

ともあるが、日本語にすると「今こそ」、「(以前と対比して) 今や」、「当面は、今ではまだ(しかしいずれにせよ)」等、微妙なニュアンスを伴って用いられるものが多いようである。又②「そもそも、もともと」、「ほら、考えてもご覧なさい」という注意を喚起する働きもある。「夫」と共通しているのは、③「今A之與B也。猶C之與D也。(A : B ≡ C : D)」で比喻を導く用法と、④仮定を導くもので、「今～。則…。」と「則」で後段を導入する形をとる場合が多い。「今」に個有の用法としては、⑤「夫～。今…。」「且夫～。今…。」の形で、「夫、且夫」とセットになって「一方」という対比を表すものがある。この用法が更にすすむと、「ところが(理想に反して一方現状は)」という意味を担って、転折にも用いられる。

複合形としては「今夫」「且夫」がある。「今夫」は話題を大きく転換して、新しい議論を導入しようとするときに用いる。「且夫」は、仮定を導く用法の他に、前の議論に一段落つけて新しい議論を始めるときに用いる。「且夫」の前後には内容的に分断がある場合がある。「夫」の①と似て、「且夫A之所以VP者。[爲]～[也]。」の形で用いられると、新しい論点を説き起しながら同時に説明を加える働きがある。

第二のグループには、「而、則、且、乃今」がある。「而」は転折にも用いられるが、順接で用いられる場合には、論理的必然性よりも時間的關係を表す。①「～して(その後)…する」①「～して(その上)…する」、②「～しながら(同時に)…する」(但し前後は同方向のことがら)②「～でありかつ…である」。③「A而B。A' 而B'。(A' 而B'。)」の様に連用して「AならばB」の論理関係も表すがやはり時間的順序を言外に含んでいる。時間的順序を離れると、もはや順接ではなく、④「～、一方…」という対比、又は⑤「～でありながら…」(前後が逆方向のことがら)という逆接も表す。

「則」は、主に論理的關係を表し、前段は仮定や想定である。形式としては、「A則B」と単独で用いる他に、「A則B、C則D、E則F。→(A・C・E)則G。H則I」「A則B、C則D。→B則E、B' 則F。→F則G。E則H。→D則I」や、「A則B、B則C、C則D、D則E」「A則B、B' 則C」など芋づる式のもの、「AB則CD、CB則AD」「A則B、A則B」など、多くは始めの仮定から、

一気に結論へ昇りつめようとする場合などに、畳みかけるように用いられている。

融合形として「～而…。則一。」という形がある。「～して…すれば、一。」「～して…ならば、一」或は「一方で～しておきながら他方で…すると、一。」等、いずれにしても「而」は時間的關係を表し、そういう前提、仮定のもとである論理的帰結が得られる、という仕組になっている。

「且」は文頭に用いられて、「それに又」という付加を表す。「A且B」で、「Aその上更にB（AとBは関連のあることがら）」という基本的用法の他に「Aであるのにそれでも尚B」という若干屈折した用法もみられる。「乃今」は「そこで今、初めて今」という意味で順接に用いられる。

複合形としては「然則」がある。「A然則B」の形で、「もしAのことがらが事実／自明である／成立するとしたら、ひと言でいうとBである」「Aということは、換言すればBである」のように、Aという事柄をBにパラフレーズするときに用いられる。

第三のグループには「乃、雖、然」がある。「乃」は、「夫～。乃…。」の形で、「～であるのに、以外にも（なんとまあ）…。」という意味を表す。期待されること、予想などに反した政策を批判する際に用いる常套語である。同類に、複合形で「今乃」がある。「（～という事実がありながら）、今なんとまあ……」という意味で、機能は先の「乃」と同じである。

「雖」は、①「雖～。則…。一也。」の形で、「～（しようと）しても、……。その理由は一。」つまり、ある事柄とその好ましくない帰結の關係の根拠を説明したり、②「夫～。雖…。一。」の形で「そもそも～しておいて、……しようとしても一（だめ）だ。」など、文字通り屈折した關係を表す文脈の中で用いられている。曲型的な「雖～。而…。」の形もみられる。「雖」が両伝で用いられる形は以上の3つである。

「然」が用いられるときは前後の論理的關係は薄弱である。又複合形「雖然」「然而」がある。「雖然」は文頭にあって轉換の働きをする。「然而」は①「～然而…者。何也。」の形で相反する事柄に疑問を提出したり、②「A雖B。然而C D。」（AはBであるが、しかしCはDである。）など、非常に屈折した事柄を述

べるのに用いられている。③「～。然而…。」の形で用いられたときは、かなり大きな転折である。

第四のグループには、「故、是、此」がある。「故」は前段を受けて結論を導く基本的な用法だが、「是故」となると更に大きな結論を導く。例えば「是故～。A之所以VP～也。」や「是故～。則…。亦明矣。」など、議論の大きな節目をつくる。「是以～者。」の形では、結果や理由を結論づける。「此」は、①「此所謂～[者]也。」の形で、成語を利用したり、数語で前段の内容を簡潔にまとめるときに用いられ、又②「此A之所以～也。」の形で理由をまとめるときに用いられる。

5.2 対話のマーク

説得には、説得する人とされる人、話し手と聞き手がいる。換言すれば、一方的に説得するにせよ、問答の形をとるにせよ、相手を意識し、自分と相手の関係を推し測りながら、相手にアピールすることが必要となる。対話のマークはまず、語彙で表されるものと文法形式で表されるものとがある。前者には 1) 人称代名詞、2) 美化語、3) 特殊語彙の三種がある。人称代名詞は、蘇秦・張儀が自らを「臣」と称し、王を「大王、君」と呼び、又王も自らを「寡人」、論客を「子、上客、足下」などと呼び、それらを発言の中に混入させて用いるが、呼びかけという形では用いない。美化語は蘇秦・張儀が遜って「愚慮、愚計、敝邑、敝甲調兵」といい、王が論客に敬意を払って「明教、明詔」という類のものである。特殊語彙は、副詞の「竊」、動詞の「願」、介詞の「爲（去声）」である。これら三語は、両伝の説得の文章に頻出するものである。又、語気を表す終助詞の「矣」「哉」「乎」も多用されている。

文法形式としては、1) 疑問形、2) 反語形の2つがある。疑問形はそのほとんどが、自問自答の形で、自ら出題しそれを解く形をとりながら自説を展開するのに用いられる。「是何也。」「大王知其所以然乎。」などの例がある。これらの疑問文の直後に答えを言うのが普通である。しかし、蘇秦が楚王に対しては、疑問形の本来の機能を生かして、「二者大王何居焉。」と質問している。諸侯を仕えさせて自ら天下に王たると、秦に服従して臣下の地位に甘んずるのとどちらを選ぶ

か、と合従協力の決断を迫るのである。しかし、実際にはこれは質問という本来の機能を離れて、どちらを選ぶべきかは自明である、ということを表わしている。反語形は、「豈～哉」「何～乎」「豈～乎」「奈之乎」「安～」「～乎」が両伝にみられる。反語形も、本来疑問文であった形式が、本来の働き以外の機能を獲得し、多く終助詞を伴って形式化したものであることを考えると、対話のマークとしてまとめられる文法形式の特徴は、形式本来の機能と、実際に使われたときに表す意味的機能とのずれであるといえよう。

5.3 説得の常套句

説得の常套句と考えられるものは、3.1と3.2でそれぞれ蘇秦・張儀の言説を分析した際に、パターンFとして分類したものである。それぞれの機能についても既に述べたので、ここでは詳説しない。

6. おわりに

本稿では説得の文章の分析として、試みに蘇秦・張儀両列伝の蘇秦と張儀の言説を取り上げ、政策決定のためのアカデミック・ディベートの理論を援用して、何故両者の弁舌が今日の私たちにも生き生きと語りかけてくるのかを考察した。東洋のものと西洋のものとを結びつけたり、安易な説明に陥ったり、様々な誤謬も少なくないと懸念しているが、このような史記の楽しみ方があっても良いのではないかと思ひ敢えて公にする次第である。

両伝の流れについて、説得の言語以外にも、地の文で非常に面白い現象がみられるが、(特に助辞の「乃、於是、又、因、是時、復」の用い方)紙幅の関係もあり、今後の機会を待って改めて述べたいと思う。

[注]

- 1) 蘇秦列伝と張儀列伝とが型式・内容の上で対応していることに関する、“列伝と列伝との関係に着目する”というアイデアは、名古屋大学中国文学研究室において、1990年4月より現在に至るまで行われている杉山寛行講師の「中国文学の諸問題」と題する一連の演習の中で得た。

- 2) 本稿では、「弁論」を「弁明して論ずること、又互いに論じあうこと」の意に、「弁舌」を「言い方の巧みなこと、又巧みな表現」というポジティブな言葉の技術の意に、「口舌」を「口先のものいい」というネガティブな意に、「言説」を「自分の考えを述べたり、物事を説明したりする言葉（「弁舌」と「口舌」を含む）」の意に用いる。
- 3) 主要争点（stock issues）の一つ。重要性（significance）の議論で、問題が質（quality）、量（quantity）などにおいて重大であることを論じる。
- 4) 現状分析は、主に主要争点の一つ、内因性（inherency）の議論のために必要である。問題の原因が現状の政策・制度に根ざしたものであること（causality）や、現状の政策や制度では解決できない理由（barrier）を論じる。
- 5) reasoning と呼ばれる。証拠資料（evidence）と結論（conclusion）を結びつける。
- 6) 主要争点の一つで、実行可能性（workability）の議論。機構、機能、財源、実施などの面で、プランの実行に際して問題がないかどうかを吟味する。
- 7) 主要争点の一つで、問題解決性（solvency）の議論。立論の型によって、PMN（Plan-Meet-Need）、PMA（Plan-Meet-Advantage）、PMG（Plan-Meet-Goal）とも呼ばれる。内因性の議論、実行可能性の議論と深く関係している。
- 8) additional advantage と呼ばれる。単なる利益・利点は advantage という。
- 9) 張儀列伝ではこの間のいきさが至極あっさりと言われ、合従に戻ることにについては、原文「諸侯聞張儀有郤武王。皆畔衡。復合従。」僅か15字である。
- 10) 両列伝の論賛参照。
- 11) 伝統的な否定側の議論である denial negative（肯定側の議論を徹底的に論破する）や、constructive negative（現状の利点を強調したり、現状のシステム内での小幅修正により問題解決が可能であることを主張したりする）と異なり、現状変革の必要性を全面的に認めた上で、肯定側の提出するプランとは異なる（ディベートの上では extra-topical な）優れたプランを提出するというもの。
- 12) 『戦国策』では、蘇秦はまず始めに、合従策ではなく連衡策を説くために秦の恵王を説得しようとする。秦王に、「折角遠方からはるばるやって来て下さったが、今はその時機ではないので、又日を改めてお願いしたい。」と体裁良く断られても、すぐには引き下がらないで延々自説を述べるが容れられなかった。資金がなくなった蘇秦は、ここで故郷の洛陽に帰った。ところが家の誰からも相手にされないのので、「これは皆秦のせいだ。」と奮奮して書物を読み、遊説の術を会得し、以後六国合従を説いてまわる話になっている。本稿では『史記』と『戦国策』の異同を述べるのが主眼ではないので、必要のない限り、『戦国策』については敢えて触れない。
- 13) 史記會注考證本では、この文は次の「是我一舉而名實附也」の下にあるが、考證の黃武三の説を採って順序を入れかえた。
- 14) 史記會注考證本では本文は、「齊韓之與國也」となっているが、考證の、「齊」は衍字

で「韓」の下に「周」の字が脱けているという説を採った。このままでは司馬錯の⑧'における周について述べた部分(㉔㉔'㉔')と韓について述べた部分(㉔'㉔'㉔')とが対応せず解し難い。

- 15) 例えば、張儀の一連の議論の中で繰り返し現れるフレーズ「大王不事秦」（もし大王様が秦に服従されなければ）の if 節を受ける then …の部分が、始めの魏・楚では間接的であり、魏ではまず韓を攻めて魏を困難な状況に追い込むとしており、楚でも同様、韓と魏とに攻め込んで云々となっている。それが韓になると直接的で、相手国にすぐに攻め込む、という言い方に変わる。更に次の斉になると、韓・魏・趙など他国の兵までも動員する、となり、次の趙では韓・魏・斉・楚の四国を合わせて出兵する、となり、最後の燕では以上の四国に趙も合わせ秦自らも出兵する、というように刻々と変化する状況を反映している。
- 16) a) 類には他に、「竊爲君計者」、c) 類には他に、「臣竊聞〜」、「臣竊以…案之」、d) 類には他に「此臣之所爲君患也」又「臣竊爲大王不取也」、e) 類には他に「此臣之所以爲君願也」、「願大王孰察之」、「臣是故願大王少留意計之」、f) 類には他に「君誠能聽臣」、「大王誠能用臣之愚計」がある。
- 17) a) 類には他に「臣竊爲大王計。莫如〜。」があり、c) 類には他に「臣竊以爲大王之計過也」「臣竊爲大王危之」があり、d) 類には他に「願大王之定計」がある。
- 18) この数字は、六国の中で何番目に説得したかを表す。
- 19) この数字は、議論の中で述べられた順序を表す。一貫して蘇秦を基にしたため、張儀の方はほとんど順序が入れ換っている。
- 20) S.Q. は Status Quo の略で「現状」の意。
- 21) 王念孫の説に従い「奉陽君妬而君不任事」に改める。
- 22) 史記會注考證本は本文は「今秦之與齊也」となっているが、以下の記述と国の関係が符合しないため、考證の、齊策では「趙之與秦也」となっておりこれを是とする、という説に従う。
- 23) 本文は「而攻得十城」だが、今考證に引かれている張文虎の説、『攻』は衍字」に従う。
- 24) 実際は数語の異同がある。「秦社稷」→「秦王」、「也」→「ゆ」、「聞」→「ゆ」、「而」→「ゆ」、「梁」→「之」、「梁齊」→「齊梁」、「毋」→「無」、「按」→「案」。

—附—

テキストは、滝川亀太郎「史記會注考證」を用いた。又、必要に応じて中華書局の校点本「史記」を参照した。

(おおた かよこ 中国文学)